

# 宗教心理学研究会ニューズレター

第31号 2020.12.25

## 宗教心理学研究会

*Society for the study of psychology of religion*

### 目次

特集:コロナ禍で想うことー宗教を学び, 宗教を語り, 宗教を研究し, 宗教を実践する者としてー	1
医療現場から想うこと	石井賀洋子 2
新型コロナウイルスと宗教心理ー土御門殿御菩提所を通じての私見ー	太田俊明 3
オンラインの「傾聴者養成」	葛西賢太 5
コロナ禍で想うことーコロナ・スリップについてー	熊田一雄 7
バーチャル教会の可能性	小林正樹 7
コロナの時期に思う宗教心理	七田 敏 9
信仰は神との3密ー物理的・空間的關係を超えてー	末田啓二 10
形而上学的病の本質とSpiritualityーコロナと向き合ってー	須田恭代 12
コロナ禍に想う仏教物語の利他性	高部知子 15
コロナ禍からの「神」観再生へ	寺尾寿芳 16
危機か, 時の徴か	長倉崇宣 18
見える距離, 見えない距離ーコロナ禍で想うこと	中野美加 19
『コロナ禍』で想うことー自分なりの宗教を実践する者として	西木春男 20
新型コロナウイルスの礼拝に想う	根本和子 28
宗教心理研究の可能性ー進化心理学・進化精神医学的パースペクティブからー	原口 正 30
コロナ禍の地方寺院の営み	樋口広思 31
ウィズ・コロナ時代の宗教研究	横井桃子 32
牧師の立場からキリスト教会の課題について想うこと	渡辺俊彦 33
事務局からのお知らせ	37

### 特集:コロナ禍で想うこと

#### ー宗教を学び, 宗教を語り, 宗教を研究し, 宗教を実践する者としてー

新型コロナウイルス(COVID-19)により私たちの日常生活が大きく変わりました。日本のみならず世界中の感染状況が報じられるといったことがまさに日常になっています。そのような「コロナ禍」において、私たち宗教を学び, 宗教を語り, 宗教を研究し, 宗教を実践する者として何を想うのか ... 。宗教心理学研究会のメンバーにそれぞれ語ってもらいました。

## 医療現場から想うこと

石井賀洋子(看護師, (株)あずきプランニング)

### 新型コロナウイルス感染症と向き合っ

新型コロナウイルス感染症が話題に上り始めたのは、2020年1月ごろだったでしょうか。さまざまなメディアで取り上げられるようになり、医療現場は緊張が高まっていきました。院内感染という言葉が独り歩きし、私自身、医療従事者であることを口に出しにくくなっていきました。病院は怖い、病院に行くとコロナがうつるんじゃないかという近所の方の言葉は、病院や医療従事者に対する率直な感情だったのでしょう。未知のウイルスに対する人びとの反応に、戸惑う日々が始まりました。

現在、私は藤田医科大学病院内で、医学部腎臓内科学医局の研究補助員として業務に就いています。外来を受診される患者さまへのインタビューに携わっていますが、スタートしたのが2月。患者さまとの会話にコロナという言葉が出るようになるのに、時間はかかりませんでした。クルーズ船の乗客受け入れを藤田医科大学岡崎医療センターで開始すると、患者さまからさまざまな声を掛けられました。怖がる方もおられましたが、多くの患者さまからは、労いと感謝の言葉をいただきました。しかし、医療現場の緊張は高まるばかり。大学病院の看護師が保育園職員から子どもの登園自粛を求められたニュースは、病院職員を複雑な気持ちにさせました。子育てをしながら勤務を続ける看護師をはじめとする医療従事者は多く存在します。子どもの預け先がなければ、勤務を休まざるを得ません。藤田医科大学病院では、新型コロナウイルス感染拡大防止を目的とした小・中・高等学校等の臨時休校を受け、子どもの預け先が確保できない教職員の就労サポートとして、学内で臨時的児童預りを開始するなど、勤務を続けられるよう工夫がされました。だからといって、複雑な気持ちが軽減されたわけではありません。

### 変化していく日々の中で

病院の変化は、いろいろな場面に影響を及ぼしています。入院患者さまへの面会は早々に禁止となりました。患者さまの外来受診については、病状にもよりますが、今まで毎月受診していたのを、数か月に1度にしたという方が多くおられます。これまでの病院通いは、不要不急だったのかという思いが、頭をよぎります。医学生や看護学生の臨床実習に関しては、学校側や実習を引き受ける病院側の考えにもよりますが、期間短縮といった事態となっています。最終学年の学生には、このまま国家試験を受験し合格できるのだろうかという不安がつきまとっているようです。病院実習は、患者さまから多くのことを学ばせてもらう貴重な機会です。辛く苦しいことも多いので、実習期間が短くなったらいいなと私自身思ったことがあります。しかし、いざ実習に出られないとなると、いかに多くのことを教えられていたのかと実感するのです。自分自身が感染源になってしまう恐れ、院内感染のリスクを考えると、やむを得ない措置といえるのかもしれない。

新型コロナウイルス感染症に広く使える特効薬はまだない状況です。今、私たちにできることは何でしょう。患者さまと接するたびに、そんな思いが生じてきます。誰もが感染するかもしれないのです。諸外国の感染状況についての報道を目にするたび、日本はどうなっていくのだろう、日本の置かれている状況は大丈夫なのだろうかと不安がよぎります。国は感染防止策の強化に取り組み、医療現場にも、社会生活のあらゆる場面にも対策を求めてきます。同時に経済活動への参加も重要な政策とされています。私が日々現場で感じるのは、先の見えない不安を抱えているのは、医療従事者も同じだという現実です。厚生労働省は、身体的距離の確保(できるだけ2m)、マスクの着用、手洗いの3つを、1人ひとりの基本的な感染防止策としています。自分だけは大丈夫ということが今となっては言えない状況

の中、日々の暮らしを紡いでいかなければなりません。

### 新しい生活様式の中で思う宗教

日常生活を営む中での戸惑いは、さまざまな面で表面化しています。自身が置かれた環境により異なっていると思われませんが、日々の暮らしへの影響は大きなものがあります。公園での運動は人の少ないところで、人との会話は距離をとって、慣れるしかない、既に慣れてきたと考えられる方も多くおられると思います。医療の現場においてテレワークは難しい状況ですが、オンライン診療等の工夫はされるようになりました。それでも、対面での診療が中心となりますし、入院患者さまとの接触は必要不可欠です。対面の時間を制限されることにより、患者さまからは「言いたいことも言えない」「聞いてほしいこともわかってもらえない」といった反応もあります。患者さまに話を聞くときは横並びで、アクリル板を挟んで飛沫を予防して、今まで何気なくとっていた行動を

改めて考え直す日々です。

人の心情や行動には、説明のつかないことも多いのではないのでしょうか。人は病を得たときに、「祈る」という行為をとることがあります。平癒を心から願うのです。入院現場では、よく目にする光景でもあります。人びとが心のよりどころとして「宗教」を大切に思うことも、自然なことです。外出を控えているので、お寺にお参りに行けないと話されるお年寄りもおられます。先の見えない不安から、今までとは違った人とのつながりの重要性に気づく半面、自分が孤独な状況に置かれていることに気づかされることもあるでしょう。自死を選ぶ人の増加は、以前とは違った社会の空気を映し出しているのかもしれませんが。心穏やかに過ごすためには、どうすればいいのか。新しい生活様式を実践する中で、「宗教」の役割、「心理学」にできることを改めて見つめ直す機会を得ていると感じています。お互いの気持ちを押し量ることで、思いやりの気持ちも生まれてくるはずと信じて、日々を過ごしたいと思っています。

## 新型コロナウイルスと宗教心理 — 土御門殿御菩提所を通じての私見 —<sup>\*1</sup>

太田俊明(土御門殿御菩提所梅林寺 副住職)

私にこの執筆が回ってきたことは ... 考えてみれば「土御門殿御菩提所 ... 安倍晴明 ... まじない ... 呪術 ... アニメやゲーム」と言ったイメージからではないのだろうか ... そんなことが浮かびつつ ... 必ずしもそこだけに触れることは出来ないと考えている。

執筆日である 8 月 14 日はまさにお盆の真最中である。本年は例年と異なり「密集・密接・密室」と言う所謂「三つの密」<sup>\*2</sup> を避けるように行政

サイドの要請及びメディアでの流布の結果、社会においては自粛の風潮が生じた。結果、お盆に関しても最低限の人数での来山の必要性が生じ、当然のこと当山も同様の措置を取った。一例を挙げれば本堂内部の一方通行化、消毒液設置やフェースシールドによる対応、最低限の人数での参拝の呼びかけ、警戒地域への盆参りのお断りの実施による必要以上の接触の回避が挙げられる<sup>\*3</sup>。

\*1 本来なら仏教者としての立場から書くべきかと考えているが、特定の教団の用語や仏教学の用語は極力排除した。このことは可能な限り教団性を客観視する考えに基づくものである。

\*2 もともと「3密」と言われていたが仏教語での「三蜜」と混同されている現状がある。本来の意味を差し置いて、このような誤用が強まっているのはワンフレーズ選挙とメディアの影響が大であろうか。

\*3 また期間中は観光や見学目的の拝観を休止した。

ゆえにお盆での勤行内容についても例年とは変化した箇所もある<sup>\*1</sup>。通常は先祖回向を主としたものが中心であるが、京都地区では地蔵盆の相次ぐ中止により、地蔵盆の内容に近い差定になった。このことは疫病往生を目的とし、生かされていることへの歓喜踴躍を兼ねる趣旨になっていると考えられる。<sup>\*2</sup>

さらに、法話の内容も例年とは変化している。このことについて主として挙げてみたい。

はじめに、ウイルスは目に見えないものである。目に見えないものだからこそ得体が知れないと感じるのである。そこから生じる社会的・経済的・精神的パニックははかり知ることができないぐらい大きなものである。ゆえに開き直りや失望による過激化も生じやすい状況と見受けられた。従って、法話がそれらの緩和としての役割を果たすこととなったと考えられる。

法話中に感じたことは、ウイルス感染自体その存在が発見されるまでは「呪いや祟り」のものとして捉えられていた。理由としてウイルス自体は目に見えないものであり、それ自体「恐れおののく」対象であったからである。このことは心理的にも不安が増強され、社会全体に増幅されたと考えられる。このような状況下では祈祷やまじないが人の心の支えになり、かつ安らぎを与えられるものであった。更に言えば自らを超えた存在から発され心を癒す役割を果たす信仰の力は今以上にもたらずものということである。

しかし現代では科学および医療が進歩し、ウイルスに関する基本的概念について解明されているので知的に対応が可能である。このこと自体祟りや呪いと言うような要素は大きく減ることとなり、祈祷やまじないの役割は大きく低下した。

更に「科学技術基本法」<sup>\*3</sup>に基づく様々な施策

が行われ、ライフサイエンス分野を中心に、国内的に研究推進がされており、更に海外の成果を加えることで原因と結果の予測まで目処が立つようになった。このことにより時間的な目途が立つようになり、物理的不安の解消に大きく寄与することとなった。

更に心理的な面に関してもカタルシス及び共感的理解の重視が進んでおり、そのことをきっかけに心理的不安の解消に努められる方向に進んでいる。

ただ、新型コロナウイルスの流行によりライフスタイルの変化及びそれに伴う閉塞感が生じ経済的・社会的・精神的不安とストレスが生じていること。そのなかで閉塞感にともなう、センシティブさの過敏化と神経質化、兎いては「自粛警察等」における行動の過激化や自ら死を選び取る行為等が生じている。ここから医療保障および社会的経済的パニックの予防が最重要となる。

医療保障に関してはここでは省くが、社会的経済的パニックによる追い詰められからの解放に向けて「伴走者としての宗教者・見守ってくださる宗教的对象」の必要性を感じ、伝えることにした。

それと同時に「超能力的な何か」を求める人に対しては、呪術・まじない等は主たる解消ではなく従たる側面に変化していること。さらにそこから土御門家の当主(御殿)の行実について話を行っている。

罹患された方に対しては必ずしも本人の責任ではないこと。医療者の指示に従い対応すること。罹患されてしまった場合「新型コロナウイルス感染」をきっかけに人生観を見直す機会を佛によって与えられている面があることを伝えることにした。つまり神仏から与えられた自らを問い直す機

\*1 通常は経文読誦の後、後唄が唱えられる。その後唄は通常先祖供養の内容が主であるが、本年は厄難往生の文言に変更して修行した。

\*2 当然例年通りの先祖回向は行われた。

\*3 令和三年四月に「科学技術・イノベーション対策基本法」に変更される。この際、「人文科学のみに係るものを除く」の文言は削除される。(太田俊明[2021]「人文科学のみに係るものを除く」に関する経緯考」『宗教研究』94:4 掲載予定)

会であるとした。

また罹患されていない方に関しては予防を重視し、その予防が出来ること自体「佛の本願」であることを主に伝え、ここでも罹患された人と同様人生観を見直す機会ととらえ、伝えた。この二段組の会通により感染者に対する「差別・偏見」の解消も考慮できると考えた。

従って「新型コロナウイルス」については昔の感染症とは異なり「理解できない恐怖ではなく、理解できる恐怖」に移行している。その結果、不安をあおるまじない等は偽りの存在であり、科学的に理解することが重要であることが説明可能となる。つまり、科学で理解できる範囲で戒めを教示し、その戒めを守ることこそ仏教でいう戒その

もの<sup>\*1</sup>であり、宗教の役割は前記の以降プロセスの説明とその文化的背景である「信仰対象への道」といえよう。

そこから先祖回向の概念や習慣は「人と人とのつながりを求める限り」なくなることは無いと考えられる。そのつながりこそが宗教の力そのものであり、その象徴としての信仰対象である。信仰をきっかけにして、信仰を科学的な理解に基づき解釈する。そこから更に踏み込むことで「無(宗教的存在)」の境地に気づかされることができ、そこから初めて宗教の役割がある「無の境地からのメッセージ」に気づかされる。その境地から心的不安の解消を図ることこそ宗教・曳いては宗教心理学の役割ではないだろうか。

## オンラインの「傾聴者養成」

葛西賢太(上智大学)

2014年から、上智大学グリーンケア研究所で、傾聴者養成プログラムに関わることになった。毎週水曜夜の講義と、第一、第二土曜日は四谷で、第二、第四土曜日は大阪での演習授業を担当する。

グリーンケア研究所で行っているのは、臨床牧会教育(Clinical Pastoral Care)という方法論に基づく傾聴者養成である。米国では、医療のみならず産・学・軍とさまざまな分野で活動する傾聴者であるチャプレンを養成する方法論だ。ただし日本では、キリスト教的な「お世話」「導き」である牧会に、比較宗教(学)的な視点を取り入れている。傾聴者の訓練なのだが、単に聞くことというより、聴く姿勢を培う訓練と感じる。どんなことをやっているかを言葉にした小文を、Academia.eduで共有しているので、関心のある方はご覧いただきたい。

少人数のグループでの緊密なかかわりをし、自分自身を掘り下げる話の分かち合いをする。真摯に他人と向きあうことでエネルギーを要する

が、ぜいたくな時間である。私自身は、たくさんの受講生の人生を聞いてきたことで、たくさんの人生を生きた気がしている。そして、両親と私とのかかわりを振り返り、両親から受け取ったものを全体として自分の中に収めることができるようになったと思う。

ところが、この密なかかわりが方向転換を強いられた。コロナ禍で、人と人とが至近距離で話すことを避けることになり、大学でも学生は事実上の入構禁止となった。これまで行ってきたような対面での訓練ができない。

開講しないことも視野に入れて何度も話し合いを重ねたすえ、Zoomというオンライン会議の道具を使った授業という形で実施することがきまった。受講生は250人ほどおり、すでに仕事でZoomを使いこなしている人もあるが、PCを持たない人もあった。Zoomの使い方の解説を動画で共有するとともに、オンラインでのグループワークについて説明するオリエンテーション動画を受講生に見てもらった。研究所では受講生全員

\*1 参考『文化時報』2020/09/11 ウェブサイトバージョン 2020/09/27 18:30 時点

の接続環境を調査してくれた。そして、サポートが必要な受講生には手分けして個別に面談を設定してくれた。面談では、Zoom の使い方を電話で説明しながら実際につながるところまで手ほどきした。研究所のスタッフは、個別の相談事にも乗ってくれていたらしい。受講生は「教室」で顔合わせを兼ねて自己紹介をしてもらい、音声の状態など問題ないかチェックするとともに、懸念がある人はそのまま残ってもらって具体的に相談した。受講生にとって、この個別の面談が Zoom での開講前にあった意味は大きかったらしい。オンライン受講への不安と、教員への距離感がかなり解消されたという。

私自身は、オンラインでのカウンセリングについての学術的研究を渉獵した。オンラインでのグループワークは有効なのか、またどのようなことに留意すべきなのか、先行研究を踏まえて講義や演習を行いたかった。立命館大学のサウタツヤ先生が、この分野が遠隔心理学 (Telepsychology) と呼ばれていて、アメリカ心理学会 (APA) のガイドラインを日本心理学会が邦訳して公開していることもご教示下さった。オンラインでの一対一のカウンセリングと、オンラインのグループワークとは、同じではない。私たちが経験したことを言葉にしていく意義があるだろう。

#### 「遠隔心理学実践のためのガイドライン」

[https://psych.or.jp/special/covid19/telepsychology/guidelines\\_for\\_the\\_practice\\_of\\_telepsychology/](https://psych.or.jp/special/covid19/telepsychology/guidelines_for_the_practice_of_telepsychology/)

春学期の演習が 8 月下旬に終わった。大変だったが、試行錯誤の中で、気づいたことのいくつかを紹介したい。

- 双方の声が届かないと致命的なので、マイクに配慮する必要がある。また、教員の声が途

切れ途切れでは困るのだが、本人は気づけない。音声の問題はお互いに指摘し合うように声をかけた。Wifi よりも有線 LAN 接続が安定するとわかったので、30 メートルのきしめんのようなケーブルを購入して、自分の PC まで直結した。

- 全員の顔が見え、名前が表示されるので、名前を覚えやすい。
- 隣の人と小声で話をする、ということができない。一人に話しかけることは全員に話しかけることになってしまう。同じグループの仲間を視線で励ます、といったマイクロなやりとりができない。そのため、少し早めに「教室」を開き、終了後にすぐに閉じずにあけておくことにした。
- これまで大きな紙に書いて説明できたことが、小さな画面にしか映らない。
- 教室内の移動やグループの振り分け直しなど、これまでは一声かければよかったのが、オンラインではいちいち作業しなければならない。

若干名が、接続環境が整わないことや、オンライン演習の効果に対する疑念から、受講を断念された。だが、オンラインゆえの長所もたくさんあった。耳が遠い受講生はヘッドホンを通して皆の話をしっかり聴くことができたという。少々熱があってもお腹を下していても受講できる。仕事帰りの通勤電車の中で水曜夜の講義を聴講したり、理解が不十分だった箇所を収録映像で聞き直したりできたという声も聴いた。そして、県外への移動や密接な場への出入りを控えねばならない医療職などは、オンラインだから受講を続けられたという。私自身は、新幹線の時間を気にせず面談ができたことが嬉しかった。

秋学期もオンラインで続けることがきまった。引き続きチャレンジを試みたい。

## コロナ禍で想うこと ーコロナ・スリップについてー

熊田一雄(愛知学院大学)

この小論では、宗教と社会がコロナ禍から何を学ぶことができるか、まずポジティブな面を論じてみたい。そして最後に、あまり指摘されないネガティブな面を論じてみたい。

第一に、コロナ禍によって人類は、「自然に対する畏敬」を取り戻すであろう。20世紀(前半)においては、人類は科学によって「自然環境を統御する力」をどんどん高めていく、という楽観が支配的であった。そうした楽観は、20世紀に人類が医学によってかつて人類を苦しめ続けた感染症の多くを克服した、という実績に裏付けられていた。

しかし、コロナ禍によって、そうした楽観は消し飛んでしまった。これからも、人類が科学によって統御できない感染症は次々と登場するであろう。科学と感染症の関係は、前者の勝利に終わるのではなく、「いたちごっこ」になることがはつきりした。

人類が科学によって自然環境を統御する力をどんどん高めていくという楽観は、「人間の限界」に対する痛切な認識(ウェーバー)を前提とする「救済宗教」を軽視する傾向と裏腹であった。しかしコロナ禍は、人間に科学の限界・人間の限界をつきつけた。コロナ禍は、20世紀終盤からはっ

きりしてきた「救済宗教の見直し」という潮流を加速する可能性があるのではないか。

そのことと関連して、コロナ禍は人々の「環境問題に対する意識」を敏感にさせる可能性もあるのではないか。コロナ・ウィルスはそもそもコウモリが保菌者であった。そのコウモリを食べた動物ーセンザンコウだという説があるーを人間が食べて、人間の感染症となったのである。ありとあらゆる動物を殺して食べていたから、こうなったとみることも可能である。自然環境に安易に介入すると、思いもよらぬしっぺ返しを受けることを、人間はコロナ禍から学習する可能性があるのではないか。

最後に、コロナ禍のあまり指摘されないネガティブな側面を指摘したい。それは、各種の依存症患者のコロナ・スリップという問題である。

アルコールや薬物の依存症患者が、コロナによって自助グループに集えなくなり、スリップ(再発)してしまう例が増えているそうである。オンラインで自助グループを開く試みも行われているようだが、行わないよりはマシだろうが、リアルな人間関係とは比較にならないだろう。見過ごすことのできない問題だと思う。

---

## バーチャル教会の可能性

小林正樹(中央学術研究所)

### コロナ発生

2020年3月11日、世界保健機関(WHO)は、新型コロナウイルス(COVID-19)感染症の流行をパンデミックと表現した。そして4月7日、新型コロナウイルスによる死者数は世界で8万人を超え、感染者数は141万人に上ったという<sup>\*1</sup>。

一方、日本では4月7日、安倍首相によって東京都などに対して緊急事態宣言が発表された。その後、緊急事態宣言は解除されたが、感染者数及び死者数は今でも増え続けている。そして、この原稿を書いている8月現在、この状況がいつまで続くのか、いつ終わるのか、全く見通

---

\*1『日本経済新聞』(電子版、2020年4月8日)。

しは立っていない。

このような状況の中、韓国などの世界各地において、宗教活動によって感染が拡大したと、宗教活動を批判するニュースをしばしば目にするようになって<sup>1)</sup>。

### バーチャル教会の可能性

筆者は2008年から2009年にかけて、アメリカで開発された「セカンドライフ」という仮想空間を利用したバーチャル教会(寺院)<sup>2)</sup>の可能性について研究したことがある。当時は新型インフルエンザが流行していたが、社会状況の観点から言えば、今回のコロナウイルスの流行ほどは大騒ぎをしていなかった。

当時は、感染予防という観点から仮想空間に注目したのではなく、仮想空間における無限の可能性について関心を持ったのである。例えば、仮想空間では、筆者が学んでいる『妙法蓮華経』(法華経)の世界を自分のアバターを通して体験できるのだ。

法華経を読んだことのある方なら分かると思うが、法華経の世界は不思議にあふれた広大な世界で、時間と空間を超越した最高級のSF映画を見ているような感覚になる。空を飛び宇宙をめぐる。瞬間移動や異世界の観察、世界が瞬時に変化する場面など、現実を超えた描写にあふれている。

研究報告会では、六牙の白象に乗ったアバターが空中に昇り、天空に浮いている宝塔の扉を開けて中に入ると、そこに『妙法蓮華経』があり、重要な一節を読むというパフォーマンスを披露したことが懐かしい。しかしながら、当時は、仮想空間を使った布教は“時期尚早”というのが研究の結論であった。

あれから11年、コロナ禍の真只中において、バーチャル教会の可能性について再び検討する必要があるのではないかと思うようになった。今回は、仮想空間における無限の可能性だけでなく、現実的な“感染予防対策”としての側面も加えてである。三密(密接、密集、密閉)を避けながらも人と人が出会い、交流し、布教していくツールとして活用するべきではないか。

最近、eXp Realtyという会社が開発した仮想空間オフィス「バーチャルオフィス」が注目されているという。従業員は自分のアバターで仮想世界のオフィスに出勤し、そこで会議をし、業務を行うのである。

### 宗教界への提言

今回筆者は、“布教活動が自由に行える新しいプラットフォームの開発を行うべきである”と提案したい。

筆者の今までの経験からは、仮想空間に関する既存のプラットフォームは、宗教活動を認めないものがほとんどである。なお、セカンドライフは比較的自由ではあるが、PCの性能が高くないと動かないので、一般のユーザーには向いていない。従って、低スペックのPCでも動作し、布教活動が行なえる独自のプラットフォームを開発する必要がある。開発費用の面から、単独の教団では難しい場合は、複数の教団が共同で開発すれば良いのではないか。将来的には、宗教界全体のプラットフォームに進化させても良い。

今回のコロナ禍が終わったとしても、将来、同様の問題は必ず起こるだろう。長期的な観点からも、布教活動が自由に行える新しいプラットフォームの開発は、宗教界にとっても必要不可欠のことと思う。

\*1 『産経新聞』(電子版, 2020年3月26日), 『現代ビジネス』(講談社, 電子版, 2020年4月1日) 『毎日新聞』(電子版, 2020年4月4日)。

\*2 筆者の所属する立正佼成会では布教拠点のことを教会と呼ぶが、伝統仏教における寺院(寺)と同等である。



## コロナの時期に思う宗教心理

七田 敏(学習教材制作編集者)

コロナにより人々の軸足は企業や学校など外の機関から、少なくとも時間を見れば家庭に幾分シフトしたように見える。わたしの専攻の家族学の観点からこれについて一言。日本では家庭は外の活動のための手段提供の場としての比重が高いが、一方で家庭とは、どの文化にあっても倫理基盤や宗教の基本的モデルを提供する場である。毎日の家庭生活の実践は、その人の思想や精神をあたかも鋳型で形作る機能がある。多くなった家庭時間でこうした倫理提供機能が増すところまで行くかどうか、絆そのものを強め、共通の高い価値に力を合わせて向かっていくような家庭像が生まれてくるかどうかは、もっと根本的な内実レベルでの価値変化が生じていくかどうかにかかっている。

コロナ回避という生命防御姿勢は、ソーシャルディスタンスという、極めて自然な対策をもたらした。生命維持は文化に優先し、その必然により文化に変化を生じさせつつある。文化心理学的に見ると、密を回避するという対策は、人と人の接続を心理基盤とする日本のような集団主義文化にとって、一種のくさびのようなものである。半ば強制的に、その第一の価値であり、最大のエネルギー源である、親しい人との密で委ね合うような接続の多くに対して敷居が設けられ、距離を求められることになってしまった。わたしが見る限り、このことは一定の人々の内に沈鬱さをもたらしている。

楽しんでいた「密」が分解され社交時間が減るという物理的な制約の中で、人のエネルギーはどこに向かうのだろうか。一つ見られる傾向はゲームに没頭する娯楽を含め、オンライン機器を通して自己の欲するところを満足させる活動が図らずとも肥大していくことだ。その傾向は、社会学的には若い人の婚期の遅れに拍車をかけると考えられる。これは内輪のつながりに基を置いた文化から個人化と孤立化へと進む変化だ。この行き着く先の想像図は寂しく不安を伴う。

わたしは、この自然的な変化ではなく、むしろその反対方向の動き、すなわちコロナによって実感を深めた空洞を埋める、いくつかの、言ってみると生を求める反動的な宗教心理の可能性に注目したい。これらは現時点では明確に認められる動きではないが、潜在性として架空のものではないとわたしは思う。

その一つは内面志向への動きだ。例えばコロナは様々なことの進展を加速していると言われるが、世界・国・地域の経済的原理の閉塞感も累加したであろう。資源開拓と消費拡大の限界感人は人を単に持続性の模索に向かわせるだけでなく、歴史を振り返ると、物質的消費から内面・精神的な発展へ、宗教・思想の発達へ向かう動きに向かわせると提唱する人(例えば京都大学広井良典氏)もいる。倫理や宗教を志向するような胎動はあるのか。それが起こるとすると、空洞を埋め、エネルギーを向ける発達の新方向を見出すということだから、人々が惹きつけられる何かをそこに見出す必要がある。物質的な消費を上回る自己の成長・啓発の魅力と、社会の改善に対する希望と方法がそこに探索される必要がある。

そしてその内面志向の実質的な内容として、コロナ対策の時期における最も根源的な変化の可能性をわたしが感じるの、宗教哲学者マルティン・ブーバーの「われ—汝」に表される、対面を求める心理においてである。

ソーシャルディスタンスと巣ごもりの世界の中では、対面を待ち焦がれる心理が発達する。それは単にさびしい気持ち以上に、人の本質的憧憬の表出を含んでいるのではないか。

歴史的に自己中心性が深化していると見るならば、ブーバーの言い方言えば人の関係は「われ—それ」に傾倒していることになる。他者に対して無関心で、離れ、関わらず、基本的に他者をわが目標達成のための手段とみる。その姿勢にあっては、他者の尊重と他者への共感、二次

的で意識的なプロセスを通して行われる程度である。人が向き合うことなく他者を「それ」として扱い、扱われる仕組みの中で生き生きとした本来性を失い、心理的病理、社会的病弊が増加していく。

そんな中、もっと生命感あふれる本質的な存在と関係のあり方としての「われ—汝」、すなわち人格的に向き合う関係への憧憬が顕在化する契機がある。ブーバーはその人格的に向き合う人間関係の背後にその「中心」として彼が「永遠の汝」と呼ぶ神を捉える。ジョーンズが、ブーバーのその宗教観を以下のように代弁した。

無神論の拡大は宗教の知的信憑性の減退を表すものではなく、むしろ「汝」に対するように世界と関わる心理的能力、またわたしたちのすべての「汝」に対する邂逅を通してそれらの向こうにある「永遠の汝」と関わる心理的能力の減退を表している。(James W. Jones. *Contemporary psychoanalysis & Religion: Transference and Transcendence*. P130, 筆者訳)

これはある側面から宗教心理の真髄に迫るものであり、またコロナの状況下に対面を待ち焦がれる心理に呼応するものがあると私は思う。

対面すべき確立された個人、またブーバーの父子的な神—人の主従関係に基づく宗教観がこの思想の背後にあり、日本人の文化的心理とは違う側面も確かにある。ただコロナ状況下にあつて、これまでの、肩を組み所属感を与え合う身近な集合を抛り所とするという文化的傾向と習慣とは別に、あるいはそのさらに深いところに、「あなた」と向き合って対話するという、本質的なやりとりへの希求があるのではないか。二人称をめったに使わない日本人は、コロナの疎の中で「あなた」と呼んでみたい気持ちが顔を出しているのではないか。

互いを本質的な人格として迎え得ず、手段的に「それ」であるかのように触れ合うことが大勢を占める社会の病弊の中にあつて、もっと生き生きした生命感あふれる関係を求める渴望は、人が気づかずに経験している宗教心理なのではないだろうか。

## 信仰は神との3密 —物理的・空間的關係を超えて—

末田啓二(甲子園短期大学)

半年以上にもわたって続くコロナ騒ぎは、9月の時点になっても一向に下火になる気配がありません。アメリカをはじめ、ヨーロッパの各国はパンデミックの再発に戦々恐々としているのが現状です。このコロナ騒ぎの中、日本はもちろん世界中でこれまでの社会通念や、社会常識が覆され、見直されることになりました。その1つが「3密」という新語に代表されます。密集・密閉・密接は現代社会、特に都市化が進んだ地域においては、これまで日常頻繁にどこにでも生起している社会現象であり、人間が「人と人との間(関係)」と表現されるように、社会的存在が人間の本質とされてきました。何がしかの集団に属し、そこで

多くの人と交流し、特定の人との密接なかかわりを通して人間関係を深化させていく。これら一連の過程は社会適応上不可欠であり、幸福の源泉と受け止められてきました。3密というごく自然な、当たり前の人間行動が、新型コロナウイルスによって否定されてしまったのです。「3密を避けよ」と連日どのテレビ局も大声で報じています。児童誘拐が多発した一時期、小学校では「知らない大人の人に声をかけられたら知らないふりをするのよ」と教えたと聞いています。ハグや接吻、握手など、あいさつすら拒否しなければならない社会はどこか異常です。人間性の根源である絆が否定されているようで、コロナ感染の危険性と同

様に、人類の文化的危機に違いありません。

このような不安や緊張が続く社会状況では、必ずと言っていい位に排除の論理や差別意識が跋扈します。コロナ感染者だけでなく、感染者が所属する学校や職場、さらには医療従事者や施設職員までもがその対象とされています。かつての原発事故の被ばく者や地域への理不尽な差別を髣髴させます。いわば二次災害のような形で大きな社会問題が生じてきました。これまで問題が生じるたびに幾度となく自戒・反省してきたこれらの排除の論理や差別意識は、今回のコロナ騒ぎでも顕在化し、原罪のように人間の深層に常に潜在していることを印象付けています。

ところで、私はある小さなプロテスタント教会に所属し、50年にわたって信仰生活を続けてきました。今回のコロナ騒ぎで、集団礼拝も一時は「自粛」となり、on lineによる家庭礼拝を余儀なくされました。信仰生活にも人間関係の維持・発展が重要で、そのためにもこの3密が不可欠であるというのが私の信念でしたので、on line礼拝を通して、信仰とは何か？宗教とは何か？を改めて考える機会となりました。普段同じ教会に集う者同士の絆、仲間意識など人間関係に気を配ることが多く、神との関係以上に人との関係に目を向けていた自分に気付かされました。信仰や宗教の本質は、神と我あるいは我らとの関係性にあると思います。この関係性に着目すれば、3密という物理的・空間的要因から解放され、いわば「心の3密」が強化される方向に作用するのではないかと。あまりにも遅いこの気づきに愕然としましたが、目からウロコが落ちたような爽快感を

経験しました。

現代社会は手紙や電話、インターネットなどの通信手段など、絆に不可欠な3密を補完してくれる多くの手段を手に入れました。with coronaの下では私たちは社会生活においても信仰生活においても発想の転換(コンバージョン: 転換, 回心)が求められることになるでしょう。社会的距離(social distance)に示されるように、物理的・空間的距離の制限は必然的に心理的距離の重要性を増加させます。これからの社会生活においては、新たな人間関係のあり方が模索されるでしょうし、信仰生活においては、個人と神との対話(祈り)や関係性の確認(信仰告白)などは3密とは全く関係ないために、これまで以上に個人の信仰、個人の宗教が強く強調されるかもしれません。しかしながらこれまでの我らの信仰、共同体としての教会という側面も宗教や信仰には欠かせない本質です。従って個人と神との関係性と、教会という共同体における人間関係との両側面のバランスのとり方が問題になりますが、個々人の信仰や宗教観の違いはこのバランスのとり方、どちらを優先するかの違いとも言えるかもしれません。しかもこのバランスのとり方は極めて難しく、あたかも経済活動と感染防止とのバランスが問題になっているように、普遍的な解答は極めて得にくいのです。

後期高齢者の仲間入りした私にとっては、加齢に伴う人との交流の減少、活動領域の狭小化が、必然的に神との関係性を強めているような感じがします。このように加齢に伴い、信仰のあり方、宗教観も大きく変化するようです。

## 形而上学的病の本質と Spirituality —コロナと向き合っ—

須田恭代

前書き)

臨死体験(NDE)を持っている人はそのことをあまり、口外したがる。その理由は自らの体験を語っても疑問符を持たれるだけで、理解どころか反感すら持たれることがあるからだ。その体験者はその後の人生観を大きく変えるのが常だが、残念なことに、体験を他者に伝えたいがらない。それは、臨死体験中の非現実性(たとえば、時間や空間を超越した感覚など)を表現するための適切な言葉が見つからないこと、常識概念からかけ離れ過ぎていることが、その要因であるという。(\*1)これから私が書かせていただく内容も自分の体験に基づくとはいえ、常識概念から外れているという点で、臨死体験者と同様、一抹の躊躇と違和感を覚えていることを、ご理解いただき読んでいただければ幸いです。

新型コロナウィルス(英語で VIRUS : 現在はラテン語読みのウィルスが正式だが、ここではドイツ語式にビルスと表記させていただく)へのワクチンは来年の春には日本でも接種可能というニュースが流れてきている。コロナワクチンを待ち望む声は高いが、もし、目の前に“どうぞ”と出されても、私は拒むだろう。

薬は不思議である。薬がないと不安で仕方がない人たちがいる一方、薬を飲むことに苦痛を感じる人もいる。特に、まだ安全性が完全に証明されていないコロナワクチンに対しては恐怖すら感じる。私は虚弱体質で幼児期より体の不調に苦しんだ。特に、アトピー性皮膚炎では幼児期から30代まで難儀した。赤子時代、アトピーの皮膚をかきむしらないように、夏でも手袋で手を被っていた。中学生時代は“おじいちゃん”とあだ名がついた。おでこ、首、腕、脚の皮膚は乾燥して皺を刻み、首は掻きすぎて銅色の厚い皮膚と化していたからだ。父親は時々、“嫁に行けるかなあ・?”と心配そうに私を眺めてつぶやいた。高校

生までは“遊走腎”“心臓弁膜症”“自律神経失調症”と次々に診断され、週に1~2度は貧血で倒れて保健室で数時間、横になって休んだ。常に頭痛に悩まされていた。ところが、そんな虚弱体質の自分に決着をつける転機が来た。

それは、唯心論と不二元説を説いた谷口雅春師の“人間は神の子である”という言葉に遭遇した時だった。ルーテル教会が運営する幼稚園に通って以来、折に触れて教会に行き、“神の子”はイエス様と思っていたのに、私たち一人ひとりが神の子だと書かれていた。衝撃を受けた。谷口師は、人間の実相が“神の似姿”として造られたのだから、不調や不完全さは本来存在せず、不完全な状態は、ヒトの想像が創造した“影の姿”であると説明した。その言葉は乾いた土壤に根を下ろすが如く、私の疲れていた心身に染みわたって行った。その考え方は次第に確信となり、取っていた薬はすべて捨てた。

薬は必要ないと思った。なぜなら本当の私は“完全”なのだから。薬を取り続けている限り、薬に頼ることになる。“完全な自分”を探して頼ればよい。薬をとることは、自力で歩けるはずの人が、杖に頼るがために自分の力を発揮できないのにも似ているように思えた。私は、“自己の内在に潜む大いなる力”を信じて、精神的にも肉体的にも、独り歩きができるようになりたかった。それが私にとっての“Spirituality”の意味となり、薬を棄てたことはその旅の第一歩となった。

“Spirituality”とは何か?“完全な自分”とはどうやって見つけるのか?探究が始まった。6年間イスラム教を学び信者となりメッカやシリアの7か所のイスラム教徒聖地のすべての地に赴きラマダーンの断食も何年間か続けた。印度ではヒマラヤから南インドのゴアまでヒンズー教の聖地を15年余にかけて回り、折に触れ、スリランカ、タイ、ブータン、チベットの仏教寺院を訪れて高僧

の話聞き、バチカンの教会で祈り、イスラエルのマホメッドが昇天した黄金の寺内のキリストが祈った洞窟で瞑想し、イランの拝火教の聖地と寺院に詣でた。

そして最終的には“自分が神より戴いた生命力を信じる”が私のスピリチュアルな生き方の指標となった。自分の生命力を信じるということは誰もが持つ生命力の完全性を受け入れ、自己一体で繋がっている真実を知る事。その完全性は創り主の神から遺伝子のように受け継いだものである以上、親である“神の愛”を信じることであった。

そのような背景から、私にとって、薬の必要性は薄いものになっていった。特に西洋医学は対症療法で、症状を抑えることが主眼で、“毒を盛って毒を制す”の観念が先行して、その薬には手が出せなかった。お産した直後、抗生物質が出たが飲めなかった。30代で、腫瘍摘出手術をしたあと、翌日から出された薬も、飲めなかった。勿論、風邪薬やインフルエンザワクチンなどは飲んだことはないし、其の頃40度の熱が出て身体のリンパ腺に近い随所に膿をもった“おでき”ができて、薬は不要だった。むしろ、“有り難い、高熱で細菌が死ぬ。体の外に膿が排泄されて体内が掃除されていく”と喜んだ。いずれの場合も、結局、医者にかかることなく、布団をかぶりながら内観を続けて、その状態を甘受して自然治癒力に任せた。

息子が生まれ数か月後、種痘の予防接種を受けさせた。すると、私の薬への恐れが反映するかのようになり、高熱をだし町医者で川崎病と診断され大病院を紹介された。当時、姑と同居していたが、姑も国家試験で指圧施術資格を習得していたので、気功で治すことに同意してくれた。

すでに、自然治癒力セラピー(気功を主体として順気を体に流すことで免疫力と人間本来の生命力を活性化させ、病として現れている症状を必要善として鎮静化させていく自然療法)を習得していた私は若い息子に不具合があるたびに施術していた。“川崎病”と診断された時も病院に行かず施術で治めた。それ以後は、幼児の息子に予防接種を受けさせることはなかった。

結局、息子はインフラが整っていなかったインドの地で10年間の学生生活を送ったが、デング熱などにかかっても、薬を取ることなく気功療法に徹して、難なく経過した。

こうした西洋医学療法に対する私の頑固な拒否的態度は、どこから来ているか？それは、自分の生命力を信じることで体が根本から改善されていくという臨床的体験からだった。アトピー性体質、腎臓病、心臓病、うつ病、などを薬なしに完治させるのには、何十年という長い時間はかかったが、根本から体質を変えてきたため再発することはなかった。

対症療法の現代西洋医学の薬をとれば一時的に症状は改善され楽になるだろうが、根本体質は変えられない。そのため、残された根本原因から再発したり、違う形で病が併発されたりすることはあり得る。一方、自然治癒力を発動して体が自力で症状を改善したときは、蛹(さなぎ)が蝶になるように体質自体が変容して、病の原因が同時に除去される。だから、身体は病になるたび健全になっていくということ自ら(あるいは、クライアントの難治病の改善を通して)体験してきた。体質が変容すれば、精神状態も変容する。心身は極めて密着に影響を与えあうからだ。自分の身体のマスターは“わたし”という意識(精神)であることを、そのたびに、明白に自覚できていった。こうして、体は意識(精神)によって変革され得るという事も知った。

現代西洋医学は、解剖学から始まった。言いかえれば、“死体”を切り刻み、生命のない人間の肉体から発達していった。だから、生命力を無視し体の器官を機械のパーツのように分解して考える。人間の体の有機的結びつきや臓器や器官の関連性は考慮されない。

一方、東洋医学は、生きた体から始まる。そこには根底に“生命力”の流れを第一義に考えるから、経絡や順気の流れやバランス、心身の相関性が癒しの根本となる。気功でも漢方薬でも、アユールベダでも、整体でも、すべて、生命力、プラーナの流れが重要な診断の鍵となっている。

さて、コロナという厄介なビールスを恐れるべきかどうか？こうした精神生活をこれまで送って

きた私にとって、注意は必要だが恐れることは必要ないという思いが強い。その信念を宗教的考え方としてとらえたとしたら、ある基督教の宣教師の“信仰と健康”に関する以下の本(\*2)に書かれた信条に共感を覚える。そこに書かれている“薬と身体”、“病と癒し”については、私が抱くそれと一致している。その根底には、徹底的な生命主義、一元論の哲学、人間の本質的な神性の自覚を含めて天から与えられた“生命力”復元の方法が著者の深い信仰と体験に重なって表現されている。但し、女史の著書に書かれている“キリスト”の定義が基督教の枠内にあるのに対し、私が理解するそれはその枠を超えているために、基督教信者の方たちは抵抗を感じるだろう。

“キリスト意識”を私は、以下のように理解している。それは、インド古代から継承されてきた“クリヤ・ヨガ”(\*3)を現代に伝え、アメリカに渡り、基督教とシャンカラ哲学の共通項を教えたパラマハンサ・ヨガナンダ師が述べている(\*4)ように、“誰もが持っているキリスト(神の子)の意識”を“キリスト意識”と捉えたい。それは、谷口師が説いた“人間の持つ神の資質”とも置き換えられる。ちなみに、パラマハンサ・ヨガナンダ師はインドのシャンカラ哲学に基づく一元論の代弁者でもある。私の人生を変えた谷口雅春師とヨガナンダ師の共通性はここにある。

そこで、女史がどのように病を捉えているか？アトランダムに著書から抜粋してみたい。

① 病の原因は神聖なる科学(Christian Science)におけるキリストによって、抹殺されなければならない。もしそうでなければ、いわゆる、肉体的感覚(physical sense)が勝利するだろう。

② もし、病気が実在するならば、それは不滅性(immortality)に属することになる。

つまり、もし病気が真に本当にあるのなら、それは真実の一部であるということだ。

そこで薬剤を用いたにせよそうでないにせよ、なぜ、病(真理の状態)を打破しようと試みるのだろう？しかし、もし病気や罪が幻想であるの

なら、この滅ぶべき夢、つまり、幻想(顛倒妄想:てんどうもうそう)から目覚めることが、真の健康と私たちの本質である清らかさや不滅性に導くのである。

③ 聖典によれば、病人は決して薬剤や衛生学、その他いかなる物質的療法によっても、本当に癒されることはない。これらの方法は、問題の矛先をそらし、子供が快適に眠れるよう甘いシロップを与え、恐怖を鎮める鎮静的な一時的役目をするにほかならない。

④ 病(症状)が消えると、また再発するかもしれないのに、私たちは癒されたと思う。

しかし本当に癒されたと言うのには、病気が再発する状態が根こそぎ、取り除かれるまでは早い。

⑤ その取り除かれる原因こそ、病を創りだしている要因である、“滅びる心(mortal mind)”すなわち超越意識より離れたふらふらした心である。(引用以上)

ここで挙げられている箇条の中の“病気”という言葉を具体的に“コロナ”と置き換えてみてもう一度読んでみたい。

そして、女史の言葉がまさに真実だと納得できた場合は、コロナに対する恐怖はすでに無いということになるだろう。たとえば、⑤に述べられているように、コロナのビールスを創りだしている要因は、超越意識から離れた、滅びる心の仕業だという。超越意識は仏教的(日本的)に言えば、色即是空の“空”の域であり、滅びる心は“顛倒妄想”の移りゆく実体のない迷いの世界である。つまり、意識が限りなく超越意識に高まれば、迷いの世界に存在するコロナビールスも取りつく島もないということになるのだろう。“超越意識”は“キリスト意識”に近い場であり、そこは“人の完全なる神の資質”の場でもある。

令和2年3月から続いた数か月間、ロックダウンがかかっていたにも関わらず、様々な日常生活(厳密に言えば“活動の場”)には社会的制約や

制限が与えられていたが)に普段通りの自由な精神状態で動けたとするならば、たぶん半生を費やして培ってきた、自分の信条、つまり、常識外れた病に対する観方と体験に基づく生命力への全託の御蔭だと思ふ。さらに、コロナ禍の中だからこそ、まだ続く長いスピリチュアルな道への憧憬がさらに増していることを自覚する昨今である。

\*1 ~ "Dying to be Me ~ My Journey from Cancer, to Near Death to True Healing"

Anita Mroorjani, published by HAY HOUSE, New York, in 2012

\*2 ~ "Christian Science" 創始者、マサチューセッツ形而上学大学学長で、ボストン市所在第一科学者キリスト協会名誉牧師のメリー・ペーカー・エディ女史が残した、"Science and Health with Key to the Scriptures", (邦題: "科学と健康")

\*3 ~ 古代インドに書かれた聖典マハバラータ (the epic Mahabharat) の中にある、"バカヴァッドギータに、次のようなクリシュナ神が述べる、クリヤ・ヨガの具体的記述がある。"吸う息を吐く息に提供し、吐く息を吸う息に提供することでヨギは息の中和をはかる。"(4章・29節)

"最も高い目標を置いて、眼を眉間の一点に固定せよ。鼻孔と肺を通過するプラーナとアパーナの均衡を保ち交互の流れを抑止せよ。しかして、外界の刺激を絶ち、感覚と理性の働きを制せば、エゴと恐怖、怒りを追放できる。瞑想の達人は、こうして永遠の解脱を得る。そうすることで、心臓から生命の気、プラーナを放出し、生命力を自己の支配下に置く。"(5章 27 ~ 28 節)

\*4 ~ "The Yoga Of Jesus" "Behold, The Kingdom of God is Within You" Paramahansa Yogananda, published by Self-Realization Fellowship, Los Angeles, California, in 2007

## コロナ禍に想う仏教物語の利他性

高部知子(精神保健福祉士, 浄土宗西山深草派教師, 京都新生十全顧問)

ちょうどこの原稿の依頼を頂いた時は、お盆であった。日中にはセミが鳴き、夕方になると雷が鳴り、ひとしきりの雨の後、少しだけ涼しくなった風が通り過ぎていく。子供の頃は、そんな夏風と花火の残り香ある庭先で浴衣を着せてもらい、親戚中が集まったお墓の前で手にした提灯のロウソクに火を灯してもらう。その後、点けてもらった火が風に消されないよう細心の注意を払いながら、ソロリソロリと家まで歩き、今度は茄子やらキュウリに割りばしを差し、馬の形を模したお供えが置いてある華やかな仏壇に火を渡す。そして仏壇に火が灯った瞬間、無事に大役を努め終えたという安堵感に包まれる。今でもハッキリと覚えている感覚である。

お盆は「盂蘭盆経」という短い經典に記されたお話が由来となっている。目連という非常に優秀で初期教団の中心人物であったお弟子さんが、

とても厳しい修行の果てに神通力を得て、地獄の様子をのぞくことができるようになった時、その地獄の中に自分の母親を見つけてしまう。優しく聡明で自分を大切に守り育ててくれた母親が地獄の中でやせ細り、水を飲もうとすると、その水は熱湯に変わり口に含むことすらできないでいる。そこで目連は慌てて神通力を用い、母親に食べ物を送ると、今度はその食べ物も全て母親の口元で炎となってしまい、食べさせることができないどころか、余計に母親に怪我を負わせてしまう。あまりの悲しみと自分の厳しい修行の成果が何の役にも立たない事態に「啼泣すること幼児の如し」。目連は「なぜ虫も殺さぬ優しい母があのような目に合うのか。どのような罪があるのか」とお釈迦様に尋ねる。するとお釈迦様は「目連が出家して間もない頃、他の修行僧とともに托鉢に出かけた時、目連の母は自分の息子にだけ食べ物

を多く与え、他の修行僧には本当はまだ食べ物が残っているのに明日また息子に与えたい一心から、もう食べ物が残っていないと嘘をつき、粗末なものしか与えなかった」それを「慳貪(けんどん)の罪という」と仰ったと記されている。

このコロナ禍、連日のようにニュースで取り上げられているが、「マスク」や「消毒液」「除菌グッズ」などがすぐに売り切れ、なかなか買い物に出られない高齢者は、たった一枚のマスクをボロボロになるまで身に着けていたりする。おそらく何の予防効果もないであろうマスクになっているのに。あるいはマスクなんてつけても仕方ない、コロナになったらなつて仕方ないという人がいる。まだ自分はマスクを持っているのに、自分の子供のため、あるいは必要になった時のためにと三つ余分に買って行く女性がいる。例えばマスクをつけるのは自分のためであって、他の人がどうであるかは全く考えない。こういう人たちが犯している罪が「慳貪の罪」。目連尊師の母親が犯し、五百回生まれ変わるほどの長い間、食べたいもの欲しいものが手に入らない地獄に落ちなければならなかった罪ということになる。

仏教にはとても多くの切り口があるが、もともとは非常に限られた特別の人だけしか学ぶ機会を得られない特別な知識であった。前述した目連尊師のように、一人の僧が時間も、時には命さえも費やし、厳しい修行の末に体得すべき知識であり、現代でも一歩足を踏み込めば、その深さ、その広さに足が竦み、一生かかっても何一つ理解

できないのではないかと思うほど、仏教の奥は深い。しかしでは何のために仏教が存在するのかというと、その問いに答えることは簡単で答えはたったひとつしかない。ただ「人の役にたつため」である。逆にいえば、人の役に立たない仏教は存在の意味がないということにもなるであろうかと思う。

私の子供の頃は冒頭で語ったように、お盆の迎え火・送り火を、子供たちは「大役」として経験し、自然のうちに仏教物語を教訓として学ぶ機会があった。今はどうであろう。どのくらいの子供たちがお盆の由来を知り、それが「利他の心」を学ぶ機会であることを知っているのだろうか。渋滞の中、なぜ帰省するのか、なぜお墓参りに行くのか、なぜマスクを一枚、他人のために買わずにお店に残しておきましょうと言えなかった人が日本中にいたのか、仏教を学び、実践する者こそが、人にわかりやすく伝えることをなまけ、目連尊師のように自分の学問のことしか考えていなかったと、本当に心から反省しなければならないことを教えてくれた、それがコロナ禍であったのではないだろうか。...と、今日もまた、シヨンポリした気持ちのまま、ニュースをみている自分がある。やっと少しだけコロナ禍が落ち着きつつある様子が伺えるが、油断はならない。慎重に、そしてこんな時だからこそ真に「利他の心」を学べる機会と心得て、一歩ずつ確実な実践を心掛けたいと思っている。

## コロナ禍からの「神」観再生へ

寺尾寿芳(上智大学)

聞くところによれば、人類の進化においてウイルスの果たした役割は無視できない重要性を示しているという。たとえば母体にとって本来異物である精子が卵子の細胞膜を破って侵入し、受精するという生命活動の最も基本的な仕組みすら、じつはウイルスから学んだという説があるらしい。その後の進化の過程でも、ウイルス感染にときに

対抗し、またときに受容することで生き延びたものたちが、現在の人間のありようを導いている面も否定できないだろう。異物の挑戦を受け、異物に敗れ、異物を同化することで自己同一性を内破し、変容し、成長することが生物の進化の本質だといえるだろう。

宗教にこの事態を読み込めば、異物の異他性



の根源にあるべき超越性は、人間の意思の枠外に現れるはたらきである点に注目すべきだろう。つまり神との出会いは基本的に初戦での負け戦を宿命づけられた「不意打ち」に遭遇するという危険な出来事なのである。したがって、「神」との出会いに発する宗教の成立において、合理性の逸脱と戦慄する畏怖の念が不可避だった。実際、「神」の姿はときに異様なものとして描かれた。旧約聖書では煙を吐きながら天空を飛び回る、目玉が数多く付いている車輪という妖怪のような神のイメージを読み取ることができる。悟りへの道行きを理知的に描き出した仏教にも、密教に至ってバラモン教由来のおどろおどろしい神々が密輸入された。日本の神々も荒ぶる神はときに大きな役割を果たし、民間信仰的な場面でもたとえば天然痘の神であった良の金神は救済神へと描き直されたが、そうした神々が顕現した現場では開祖の神がかりといった異常事態が往々にして発生していた。この危機を畏怖の念をもって受容し乗り越えるなかで、我々は恐れと共存する道を曲がりなりに編み出してきたと言えるだろう。

しかし、こうした巧みな展開ないしは転回が徐々に難しくなってきた。その典型的な事例が核をめぐって見て取れる。核分裂によって生じる膨大なエネルギーは敵をせん滅する核兵器という悪意に出自をもっているが、その恐ろしさと怪しさを核の平和利用という、畏怖の念をまったく感じさせない「嘘」によって抑圧しようとした。いまさら「あれは嘘でした」と告白するわけにもいかず、畏怖の念に発する自制心を自覚することができないまま、ときに剥き出しの悪魔的な暴力に苛まれる結果になっている。「ヒロシマ・ナガサキ・チェルノブイリ・フクシマ」という問題提起も思想的には衝撃を与え、数々の思索を生んだが、宗教的に「神」観の重要な変容を導いたとはいまだ言えないと思う。

コロナ禍はこうした事態を上塗りするだけだと

もいえるし、また変化をもたらすものだともいえる。一方では、新型コロナウイルスとの遭遇においても経済的打撃からの回復を最優先させ、急ごしらえのワクチンごときで統御できるという「嘘」に人々は依存しようとしているように筆者にはみえる。「なかったことに」すると言えるだろう。当然、そこには「神」の顕現はない。他方であまりに巨大で、身近に実感することができなかった核とは異なり、ウイルスはきわめて身近であり、すでに自身の内部に巣食っているかもしれない存在である。そしてなにより、振る舞いの如何によって自らが感染源になるかならないかをかなりの程度まで決定しうるような存在でもある。どこか他人事だった核とは異なり、ここにある種の主体性が成立する。異物の侵入を受け、しかしそのことで主体的に思考し、判断を行い、あるべき共通善を模索するのだ。ウイルスはうつさず、ウイルス感染を避ける振る舞いは広めていく。内面を見つめつつ、外部との交流に常に配慮する。ここに新たな宗教的な態度つまり「神」との出会い方を予覚できるかもしれないと言ったら、暴論の誹りを免れえないであろうか。

野生動物の食用化という近代社会の影の側面から侵入したコロナ禍は、いまわれわれは環境のなかにあるとともに、環境がわれわれのなかにもあることを学ぶ逆説的契機と解することもできる。思うに、もはや環境抜きの「神」はない。ここでカトリック信徒でもある筆者はこの機会に多くの方々が、ローマ教皇フランシスコが発した環境回勅『ラウダート・シ』にふれることで、その霊性が多様な宗教的伝統といかなる地平融合を起こすのか、そしていかなる「神」観の変異をもたらすのかを実験してもらいたいとひそかに願っている。それこそが人類が生き延び、久しく見失ってきた「神」の顕れを感じとるために有意義な営みだと思うのだが、これもやはり我田引水に過ぎるだろうか。

## 危機か、時の徴か

長倉崇宣(キリスト教放送局日本 FEBC)

今回、松島公望先生よりご連絡を頂戴し、会に名前を連ねながら何一つ貢献できていない者には身に余るご依頼と恐縮しております。特に、宗教心理学の学問的訓練を受けておらず、「宗教を実践する者」としても若輩者である私に何が出来るかと考えましたが、自らが置かれている場所から見えているものを分かちあうことで皆様の研究に少しでもお役に立てればと存じ、雑文を認めます。ご笑覧頂ければ幸いです。

現在私は、キリスト教放送局日本 FEBC (www.febcjp.com) のスタッフとして、キリスト教宣教の働きに従事しております。弊社はラジオとインターネットにて放送をしており、元来は第二次世界大戦後に米国のプロテスタント福音派宣教師によって始められた団体です。しかし現在ではカトリックや正教会も含めた「エキュメニカル」(キリスト教諸教派の一致・対話を目指す志向)な団体として、現代日本でメディアを用いた宣教のあり方を模索しております。

上述のことから、2020年2月以降の新型コロナへの教会の取り組みについては、比較的幅の広い教会教派の取り組みに触れることが出来ました。それらを敢えて大別しますと、突然の活動休止を迫られた動揺期を経て、中長期的対応を迫られる中での自らのあり方を問わざるを得なくなった反省期、そして現在は(希望的観測も含んだ)再開への期待と準備の安定期に入っているように感じられます。

しかしこの「安定」は、私には、多くの犠牲と無理の上に辛うじてバランスを保っている状況と思えてなりません。献金収入減という経済的打撃以上に、教会の核心である礼拝をオンラインで代替せざるをえなくなった現実、それによって、これまで教会に集えなかった方々がアクセス出来るようになった一方、経済的理由等によってオンライン礼拝にすら参加出来ない人が出てきてしまっ

た現実があり、そしてこの現実には可視化されにくいという二重の疎外を生んでいるように思われるからです。

日本の教会は高齢者が多く、また心の病を抱えた方も少なくありません。そうした「オンライン礼拝にすら参加できない人々」を、全く意図せざる形で削ぎ落とす形でしか礼拝を維持出来ない現実、多くの教会が直面させられたことは、教会の責任を担う教職者や信徒にとって重大な精神的負担となっているように思われます。事実、私自身が知っている限りでも、このコロナ以降、精神的不調を訴えている教会責任者は少なくありません。

このように、内外に大きな負担を払いながら、教会は礼拝をオンラインの形で維持していますが、そのことで「自らがやっている礼拝行為が如何にリタージカル(典礼的)であるか」ということが、教職者のみならず一般信徒にとっても体験的に理解されたのが、このコロナ禍ではなかったかと思えます。それは、正教会やカトリック教会のような典礼を重視する教会のみならず、私自身が所属する福音派教会、ともすると「アンチ・リタージカル」な教会に於いても、そのような感覚は広がっているように思われます。つまり、「教会堂に共にいる」というただその事が、礼拝行為に於いて極めて重要な構成要素であったという感覚です。

イエスは、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」(マタイによる福音書 18章 18～20節)と語っていますが、コロナ禍によって、「二人または三人がわたしの名によって集まる」契機が奪われることで、そのことへの切実な感覚を呼び覚まされた、と言えるかもしれません。

人類史を見た時、パンデミックはその前後で世界を一変させるとも言われます。もしそうなら、ウ

イズコロナの中で教会はどうあるべきかを、教会は自らに問い始めています。何故なら、空間と時間を他者と共有する「三密」をこそ信仰生活の前提としてきた教会が、その前提が禁じられたということは、自分たちの信仰を文字通りゼロから問い直さざるを得ない状況が訪れてしまったということだからです。しかし、この厳しい状況に真剣に向き合う体力が、超高齢化かつ限界集落化した日本の多くの教会にあるかと言うと極めて難しいのではないかわざされ、対応を間違えば、かえってその「死期」を早めることにすらなりかねないと懸念しております。

ただ、キリスト教信仰に於いて死は必ずしも忌

み嫌うべきものではありません。この信仰の中核は復活信仰ですが、言うまでもなく、死ななければ復活はありません。伝統の名のもとに、これまでの教会のあり方の延命を図るのか。それとも、一度それに死んで新しいのちに甦ることを願うのか。その渦中に私達はいるということ、切実に感じております。

このコロナ禍は、どのような社会団体にとっても危機であることは、間違いありません。肝心なのは、この危機を、過ぎ去れば良いもの・克服すべき対象と考えるか、それとも自らのあり様を問い直し、新たなステージへと歩みだすための「時の徴」とするかは、大きな違いだと感じております。

## 見える距離、見えない距離～コロナ禍で想うこと

中野美加(高槻市保健所 非常勤心理職)

今回の COVID-19 のパンデミックで、筆者を含む一般人のお馴染みになった言葉に「ディスタンス(距離)」があります。コロナウイルスの感染拡大を抑えるために 2m の「身体的距離」の確保が、行政から推奨されています。実際には、2m は中々難しいため、スーパーマーケットのレジ前やバス停では足下に約 1m 間隔でテープが貼られ、距離を開けて並ぶことが求められています。筆者の職場でも、会議では椅子一つ分空けて座るようになり、相談者との面談も今までの配置にプラス机一つ分、間を空けて行われます。昼休みも時間差で取り、お弁当も人との間を空けて黙々と食事し、所内で人とすれ違わないよう、配慮が求められています。町のパン屋さんでは人数制限が有り、外からショーウィンドウ越しにお客の数を目で確かめてから入店します。

職場でも町でも、外出するたび距離を意識して最初は気を遣いましたが、慣れてくると個人的には、この距離感がなかなか快適なのです。これらの身体的距離は目に見える距離ですが、心理的な距離、余裕も生じているのだと思います。今回の場合は、見知らぬもの同士、共通の課題に立

ち向かっているというか、地域、個人の温度差はあるにしろ、共通の禍を背負って共に戦っているという連帯感があつたかもしれません。

このコロナ禍で、最も距離を意識したものに、筆者の場合、教会があります。地域によって対応は様々だったと思いますが、感染拡大地域のキリスト教会では主日に礼拝やミサが行われない事態となりました。筆者の所属教会(プロテスタント)は大阪市内の中央にあるため、3月8日から緊急事態宣言が解除されるまで、全ての集会はお休みになりました。役員会はリモートで行われ、礼拝要旨はホームページで確認することになりました。宣言が解除されてからは感染が拡大しましたから、礼拝は再開しましたが、なるべく家庭で礼拝を守るようにと YouTube で礼拝が配信されるようになりました。各教会、それぞれの事情に応じて様々な工夫がなされたようです。また各教団では、信徒、牧会者向けに、様々な情報(オンライン礼拝の始め方、献金の方法など)をホームページ等で発信しています。筆者の所属する教団では、未曾有の事態に直面し、様々な心労が重なっていると思われる牧会者やその家族へ

の相談窓口を設けるなどメンタル面にも配慮しています。

と書き進めますと、キリスト教会では信徒や牧会者に対して至れり尽くせりで、万全を期してこの危機に立ち向かっているように見えます。確かに聖書等の教科書があり、この教科書に助けられ、千年以上、数々の危機を乗り越えてきたわけですから、神学的なことに揺るぎはないはずです。しかし、IT化が進んだ世界で起こった今回の場合、個人差が非常に大きかったと思います。ITと無関係に生きてこられた高齢な信徒たち(牧会者も含む)が受けたストレスは相当なものではなかったかと想像されます。もちろんホームページを持つ教会ばかりではありませんし、無牧(牧師がいない)教会もあります。信徒同士というの

は、やはりコミュニティの仲間であって友人とは少し違いますから、教会という箱に、信徒同士集ってこそ得られる恵みが多々あるのです。

そこで、外部要因で教会との物理的な距離が空いたとき、信徒はどのように霊的孤立から逃れるのか、という問いを持ちます。入院や自宅療養などで教会から離れることはあります。しかし、そんな時は牧師や教会員が尋ねてきてくれましたが、今回の場合は、そもそも人と会えない、集うことが出来ないのです。教義的には、どこでも祈れます。しかし、周囲にキリスト者の少ない日本では、物理的な孤立から、心理的つまり霊的な孤立を防ぐために、各信徒、各教会がどのような知恵を絞ったのか。あるいは離れてしまったのか。今、筆者が切実に想う問いです。

## 『コロナ禍』で想うこと—自分なりの宗教を実践する者として

西木春男(放送大学)

### (目次)

- 1 : 地球にとってのウイルスとホモ・サピエンス。
- 2 : “今さえ良ければそれでよい”, “欲望を充たすのが幸せ”, “死ねばすべて終り。死を考えないでピンコロで死ぬのが一番”とする現代日本人と「コロナ禍」。
- 3 : 現代日本人の中での極少数派の筆者のささやかな宗教的模索と「コロナ禍」。
- 4 : 身体技法, 生と死の学びの場と「コロナ禍」。安心した生き方をもたらすには, 死生観・死生学は必要。しかし, それよりも信仰心の方が強力で有効。
- 5 : まとめ—今回の「コロナ禍」後もホモ・サピエンスに迫る危機下での今後の宗教関心者・信仰者のあり方は, 欲望追求を抑えた質素な生活で見本を示すこと, 最も身近な自然である身体に関心を抱くこと—

### ( 1 : 地球にとってのウイルスとホモ・サピエンス)

( 1 - 1 )次はウイルス専門学者の説明です。

「ウイルスは三〇億年前には存在していたと考え

られている。現在わかっている最古の猿人は七〇〇万年前に現れ、現生人類(ホモ・サピエンス)が生まれたのは二〇万年前にすぎないともいわれる」(注1)。

「ウイルスが生物の進化の推進に重要な役割を果たしてきた可能性について関心が高まってきている」(注2)。

「二〇〇〇年にはウイルスが人の胎児を守っていることが明らかにされた」(注3)。

このように、ウイルスは地球上での大先輩であり、今回の「新型コロナウイルス」の他にもいろいろな種類があり、いろいろな役割をしているようである。我々ホモ・サピエンスは、今回の「新型コロナウイルス」の攻撃に対して、防衛することは、自己保存本能上当然だが、先輩たるウイルスと共存していくのが本来だ、と思います。その際、後述の野口整体等の身体技法や食生活面等で身体の自己治癒力を高め、また死生観・死生学よりも強力な宗教信仰心で精神面での治癒力を高めることは、ウイルス開発等と並ぶ防衛策として有効だと思います。

そもそも、自然界の各生物は、互いに獲物として、自然なかたちで食し合ってきた。そのことで、自らや他の生物が生存でき、自然界のバランスがとれて来た。そのように、我々ホモ・サピエンスの先祖も、かつて猛獣の餌食となったり、反対に草原や河川で出くわした小動物や魚類等を狩猟し食べて、かろうじて生き延びて来た。今回の「新型コロナウイルス」が我々ホモ・サピエンスを苦しめているのも、自然な現象であり、また我々が、防衛するのも、自然な姿である、と思う。

(1-2) 人類の一種であるネアンデルタール人が滅んで、人類がホモ・サピエンスだけになったのは 4 万年前らしい。生物の種は永遠に続くものではなく、いずれ自然に亡びるものらしい。したがって、ホモ・サピエンスは何億年か 10 億年か先の地球の消滅までは存続できず、仮にホモ・サピエンスが、地球環境破壊を行わず、自然のままに生きて行くとしても、ひょっとして今後何万年も種が続かないのかもしれない。ところが、ホモ・サピエンスは、人工的な科学技術を武器に、特に前世紀以来激しく、他の生物を巻き添えにしつつ、地球環境への破壊を続けて来た。そのため、そのしっぺ返しを受け、種の本来の存続期間よりも早く、場合によっては、何十年か何百年か先に亡びるのではないかと、筆者は危惧する。詳述すれば、ホモ・サピエンスは、地球の専制的支配者と言わんばかりに、他の生物の自然の生育を妨げ、自己の都合の良いように、養鶏・養豚・養殖等にとどまらず、遺伝子操作を行って来た。また地球を何度でも破壊できる量の核兵器を保有し、大量の電力を産み出せる原子力発電所を乱立させて来た。その核燃料の廃棄ゴミについては、「原発から出る高レベル放射性廃棄物を約 500 kg の『ガラス固定体』にする。日本の原発でこれまでに使った核燃料から 2 万 6 千本の「ガラス固定体」ができる。それを 300 メートルより深い地下に埋める「地層処分」が法律で決まっている。この放射能が天然ウラン並みに下がるのに数万～10 万年かかる」(注 4) という。そして、この核のごみの最終処分場を受け入れることに、全国各地の自治体がどことも嫌がって、まだ決まっていないという。つまり、原発のもたらす電力を

自己の欲望追求のために消費はするが、核のごみを自己の居住地周辺に「地層処分」されるのは断る、という身勝手な話だ。そんなことなら、電力消費を抑える生活つまり質素な生活を心掛け、原発に頼らない生活をするしかない。

もし地球を司る人格神がいるならば、“ホモ・サピエンスは、安楽な生活を追求して、地球とそこに住む生物に多大の迷惑をかけてきた。また原発の核のごみは、「地層処分」したとしても、今後 10 万年も放射能が下がらないというが、10 万年先に、ホモ・サピエンスは、存在しない。自らの種の亡びた後々まで迷惑を及ぼし、「今さえ良ければそれでよい」という身勝手なホモ・サピエンスには、もうこの地球上にいてほしくない”と思うだろう。

(1-3) ホモ・サピエンスは、自らの人口増加に有利な条件を追求して来た結果、“世界の 2019 年の人口は 77 億人となり、2050 年にはほぼ 100 億人に達する”という(注 5)。人口爆発である。

また他の報道によると、“地球の総人口は 2055 年には 100 億人を突破し、全ての人類がアメリカ人並みの生活を送るとしたら、地球 5 個分の資源が必要になり、このままではエネルギーの枯渇は必至”，と報じている(注 6)。今でさえ、エネルギー不足は勿論のことながら、食料不足のための農地拡大による自然破壊と、現代消費生活の生む温暖化による異常気象に我々と他の生物は苦しめられている。2050 年頃には、どんな事態が起きるのか予測もつかない。

(1-4) 今回の「新型コロナウイルス」が地球環境破壊と関係するかしらないかは、筆者にはまったくわからない。もし関係しないとしたら、次に頭に浮かぶのは、今回の「コロナ禍」は「神の見えざる手」(あるいは「神の経綸」)によるのではないかということである。

別の例だが、男女の出生の対比を「出生性比」というらしいが、ネットで調べたところでは、どの時代をとっても、男 105 : 女 100 らしい。このほぼ固定した比率は「神の見えざる手」(あるいは「神の経綸」)だ、とのネット記載は見当たらなかったが、この「出生性比」は筆者にはなんとなくそ

んな気がする。

また、ネットで調べたところ、レミングというネズミの種類は、北欧の森林では、何年か経つと大発生し、そのままでは、絶滅するので、自らの種の存続のため、一部を残し、集団移動し、川や海に阻まれると、飛び込んで集団自殺と見える行動をとるらしい。ネットで調べた限りでは、このことと「神の見えざる手」(あるいは「神の経綸」とを結び付けている記載は無かった。筆者には、対象が、よく知らないネズミの一種のことなので、はっきりしたことは言えないが、上述(1-3)の人口爆発を、念頭におくと、なんとなくそんな気がする。

筆者の知人の、ある神道系の信仰者は、「今回の『コロナ禍』は『神様のご経綸』だ。三密を避ける等の予防はしているが、仮に罹患しても、信仰心があるせいか無事に乗り切れるという安心感がある」と明言しているのを聞き、信仰の力は、コロナの場合にも、働くのだな、と筆者は感心した。「コロナ禍」が「神様のご経綸」なのかどうかはさて置き、ホモ・サピエンス全体に対する何らかの警鐘の一つとして受け止めるべきだ、と思う。それは、ホモ・サピエンスは 地球上の生物をどのようにでも操作できるのだ、という驕った、誤った考えや行動に出るべきではない。現に、大ききさとしては極めて微細な「新型コロナウイルス」に脅かされ、負かされているではないか。そして驕った考えの根底にある “今さえ良ければそれでよい”、“欲望を充たすのが幸せ”という現代の生き方を見直すべきだ、質素な生活を心掛けるべきだ、という警鐘だと思う。後述するように、宗教信仰心には、信念に基づき、強く持続的に生活スタイルの変更実践ができる力があるので、宗教信仰者は今回の「コロナ禍」に際しても、その後の他の危機の際にも乗り越えることができる、と筆者は思う。

(2: “今さえ良ければそれでよい”, “欲望を充たすのが幸せ”, “死ねばすべて終り。死を考えないでピンコロで死ぬのが一番” とする現代日本人と「コロナ禍」)

(2-1) ネット上の記事によると、2020年度当初予算での、一般会計予算の財源不足を補う新

規国債発行額は 32兆5562億円であった。

歳出面でいうと、2020年度当初予算102.7兆円のうち、国債費(国債の償還と利払い)は予算の22.8%を占める23.4兆円に上るといふ。そして2020年3月末時点で、国債・借入金・政府短期証券を合計した日本国の借金は1114兆5400億円となったといふ。その後の新型コロナ対策を盛り込んだ2020年度第2次補正予算が6月成立し、1次と合わせた新規国債発行額は57.5兆円になり、借金が更に増えた。主要国のなかでも日本の財政は突出して悪い状況といふ。(参考: 1975年での国債残高は約15兆円。1985年で約134兆円。なお1964年まで国債発行は無かった)

新型コロナ対策がなくても、上述のように、23.4兆円の国の借金返済等を2020年度中に行わなければならない。他方で、2020年度には新規に国債を32兆5562億円発行して新たな借金をせざるを得ない。筆者の感想だが、これを家庭で言えば、借金を返すために、もっと多額の借金をせざるを得ないというサラ金地獄である。しかも、これら1200兆円弱の国債残高は、次の世代の日本人の税金から返さないといけない。完済にあつては何世代かかるといふ。膨大な赤字国債残高は、“今さえ良ければそれでよい”の現れである。

(2-2) 今の中年や若い世代にとっては、筆者の何十年前の中年・若年勤労者の時代に比べ、社会保障負担、特に高齢者への保障支援が、大きく増えている。昔は無かった、40歳からの介護保険料負担が新設され、勤労者給与から天引きされるようになった。また年齢を問わず、多くの勤労者には、高齢者医療納付金の負担が今はあり、健康保険料の中の一部として、給与天引きされる。つまり今の中年・若年勤労者の給与にとっては、自己以外の社会保障のための負担が増えている。それに加えて、上述の1200兆円弱の国の借金の将来返済まで、今後自らが納税する税金で担うことになるのである。そういう中年・若年世代にとって、敬老精神が昔より薄れ、日本の将来の国や社会の在り方に夢が持てない、という心情になるとするならば、同感できる。

(2-3)このように、我々高齢者の健康は次の世代に大きく依存しないとやっていけない、ということは、以前から言われて来た。筆者は、かねてから、後述(3-3)のように、次世代への負担を少しでも減らそうと努力して来た。工夫し、頑張れば、我々高齢者自身の努力で、健康を維持できる、介護保険の世話にならなくて済む毎日を送れる。また高齢者になる手前だった中年時代の筆者も、食事を始め健康生活に、相当気を配って来た。このように、筆者にとっては、修行に似た努力が必要であった。宗教における信仰心修行を日常してきた筆者のような人間には、やりやすい努力とも言えた。

しかし身体運動や食生活配慮は面倒くさい、と安逸を優先し、自分の健康は、まずは医者まかせとし、70歳からは、健康保険自己負担が2割、75歳からは1割なので、医者にはどんどんかかろう、薬はたくさんもらおう、という高齢者はおられる。これは、自分の身体と真正面から向き合う姿勢ではなく、また費用負担面で今の高齢者を支えている次の世代への配慮に乏しい姿勢である。これは“我々が今さえ良ければそれでよい。自分が死んだあとのことは知ったことか”とする社会風潮の現れではないだろうか。ここで誤解されたくないのは、本当に困っている人たちへの配慮は必要だということである。大乘仏教でいう“利他行”、“菩薩道”をそういう人たちには、国や個人も行っていかねばならないし、また同様にコロナ禍で、今現在の生活が成り立たなくなっている人への生き延びるための、経済的支援が必要なものも当然である。

(2-4)“備えあれば患いなし”の格言は、日頃は質素な生活をして、蓄えをしておけば、いざ災難にあっても、貯金があれば、なんとかしのげる、という、昔からの、生きるための当然のことわりである。しかし日本国民は、“備えあれば患いなし”の鉄則よりも、国が借金をして、国民の多様な要望に応えようと、あれもこれもやる、という手を広げすぎた施策を容認してきた。日本人は、この「コロナ禍」に際し、生き方を見直すべきだと筆者は思う。そのためには、多くの欲望を追求し、刺激の多い、安楽な生活の優先よりも、質素

な生活を噛みしめて、その中にこそ、味わい深い充実があるという、古来の日本人先輩の生き方や思想をよみがえらせるべきだと思う。それは、超越的なものを信じる宗教の持つ価値観と結びつきやすい。また宗教信仰心は本来強い実践力を生むものなので、信仰心の持ち主の下では実践しやすいものだと思う。口で言うだけでは始まらないので、筆者は、後述(3-3)のように、以前からの、消費電力を抑える等質素な生活や食生活への配慮と並んで、身体の鍛錬を約10年前から実践し始めた。

(2-5)新型コロナウイルスは、免疫力・自己治癒力のある人には、症状が悪化しないようだ。今回の「コロナ禍」において、政府・自治体・マスメディア等で叫ばれているのは、ほとんどが、今の事態をどう乗り切るのかである。渦中にあるので、そういう目前のことが議論・広報されるのは、致し方ないが、長い目からの対処法としては、身体の免疫力・治癒力を鍛えるということが大切だと思う。我々、宗教に携わる者は、超越的なものへの信頼あるいは親近感を抱くため、普通人よりも、長い視点で災難をとらえることができ、普通人とは異なる意味をそこに見出すことができ、次いで、納得したら、信念をもって実践できる、という特質を持っている。それは宗教者の強みである。そういう意味で、宗教関心者・信仰者は、この「コロナ禍」の下では、身体技法に目を向け、身体の免疫力・治癒力向上の実践をも考えるべきだ、と筆者は思う。

(2-6)東日本大震災の時、「津波でんでんこ」「命でんでんこ」という先人の言葉があると知った。意味は「津波が来たら、各自でんでばらばらに逃げろ」「自らの命は自ら守れ」ということのような。

日本では、地震・火山活動・台風等の自然災害が、しょっちゅう不意に襲ってくる。その際、上述の「命でんでんこ」で対処せざるを得ない、というのが先人の教えである。勿論、リスク回避の事前準備は行う必要はあるが、災害に直面し、他の方策に頼るとまが無い場合には、「命でんでんこ」にならざるを得ないだろう。「コロナ禍」についても、同趣旨の考えが参考になるのではな

いだろうか。

瀬戸内寂聴氏が書いておられる。「コロナを撲滅する人間の智慧が、やがて必ずあらわれるだろう。そうしてすぐ、その後、前より強烈な力を持つ新コロナが生まれることだろう。人間の智慧とコロナの競争は、品を更(か)え、質を更(か)えても、繰り返しつつ、果てる時は来ないのではないか」(注7)と。

つまり、今回を乗り切っても、また、別のコロナが襲って来るのだろう。筆者は思うのだが、我々は、「命でんでんこ」の精神を、次の「コロナ禍」が来るまでに、具体化しておくべきではないだろうか。それは個人レベルで、質素な生活を取り入れ、余力で蓄えをし、また身体を鍛え、質素な中で生活の充実を味わいつつ、コロナを含めた災害から自らを守る習慣をつけることである。どの宗教も本来的には、欲望追求の生活よりも、質素な生活を勧めていると思う。そのため宗教関心者・信仰者には、そういう質素生活への切り替えがしやすいと思う。選挙集票力や豪華な宗教建造物を誇ったり、教団と宗教官僚の繁栄を第一義とする宗教が、もしあるとして、そこでは質素な生活が推奨されているかどうかは知らないが。

(2-7)人間が生きるということは大変なことである。例えば、ネットからのデータだが、平均寿命で見ると明治24-31年は男42.8歳、女44.3歳。昭和10年は男46.92歳、女49.63歳。昭和22年は男50.06歳、女53.96歳である。2019年は男81.41歳、女87.45歳。江戸時代は32~44歳と書いてあった。なお健康寿命(健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間)は2019年では、男72.68歳、女75.38歳とあった。

ホモ・サピエンス20万年の歴史(上述(1-1))の中で、平均寿命が50歳を超えたのは、日本でいえば、この70年間強だけである。医学の進歩とは言うが、現日本の手厚い社会保障が高齢寿命を支えている。しかもその裏打ちとなる財政面は赤字国債と中年・若年勤労者の支援で賄わざるを得ないという不自然さである。昔のホモ・サピエンスは他の野獣と死闘をくりひろげながら生き延び、その後も飢饉・旱魃・食糧難に見

舞われた。日本では終戦直後まで、満足のいく食糧事情ではなかった。筆者は1948年49年頃のひもじい空腹感の連続や1950年頃に、初めて白米を食べた美味しさを未だに忘れることができない。他方、今も、世界には多くの難民や低開発国の人たちが飢えと医療不足の状況下で苦しんでいる。つまりここでは、生きるということの大変さを言いたい。生きる大変さを自覚するならば、今回の「コロナ禍」が生きていることを脅かしているのだから、この際立ち止まって、単に今の「コロナ禍」による苦しみを早急に乗り越えることだけではなく、自分の死後の将来のこと(死後の世界に、自分は今と同じように大変な思いで、何らかのかたちで生きるのだろうか、あるいは次世代以降の日本人の生きる大変さはどうなるのだろうか、そういう将来の世代に自分は、自分の死後も迷惑をかけているのではないか、あるいは自分もこの世に生存中、間接的な加担をした地球環境破壊で、ホモ・サピエンスや他の生物は生き延びるのだろうか)に思いをはせるべきだろう。

(3:現代日本人の中での極少数派の筆者のささやかな宗教的模索と「コロナ禍」)

(3-1)筆者は、何十年も前から、ある伝統仏教の方式での毎日のお勤めを自宅で一人でして来た。その時唱えるものに、「懺悔文」(注8)と「回向文」(注9)がある。長年、お勤めのたびごとに思ったことは、「懺悔文」も「回向文」も言っている内容はまともなことだ。しかし現実にはあまりにも、これらの言葉を裏切っている。こんな空々しい言葉を唱えて、それで終りではいけない、ということであった。伝統仏教の多くのご信者さんが、今でも、これらを唱えているが、筆者と同じ疑問を持っているのだろうか。いや、皆が昔から唱えているから、自分も唱えているだけのことで、深く考えてはいないだろう、と思う。でも筆者は、納得できず、これらを唱えはするが、別に自分で実践できることはないかと模索して来た。

振返れば、ホモ・サピエンスの我欲から、地球上の他生物を、度を超して、自己の都合の良いように操作し、地球環境を汚染・破壊して来た。そして、今我々は、そういう他生物操作や地球環境汚染・破壊の状況下で、食物を得、電力等を使



用することでしか生存できない。このことは、容易に改めることができない。懺悔して済む問題ではない。懺悔文を口で唱えて、ハイ懺悔しました、というのはあまりにも偽善的である。懺悔文の“我れが造ってきた悪業は、貪瞋痴により、身と語と意より生ずる”の言葉は、おそらく、現代のように、地球環境破壊とか他生物への人工的加工が大規模で行なわれる前の時代にできた言葉だろう。

また「回向文」には“われらと衆生と みなともに仏道を成ぜん”という楽観的な言葉があるが、ここで言う衆生とは全生物を言う(注9)。上述(1-1)の“自然界のバランスの中での自然なかたちで食し合う”ことの程度をはるかに超えて、人工的な捻じ曲げを他の生物に対して過度に行った来たことの恩恵を受けるしか、生存できない我々が、“ともに仏道を成ぜん”と唱えることはあまりにも白々しい嘘でしかない。

(3-2)キリスト教再洗礼派の宗教的信念から、現代文明生活を拒んで、集団生活しているアーミッシュ(注10)と言われる人たちがアメリカにいと知った。日本では、信仰を基礎とするそういう団体は無いようだ。「文明社会の中で、それを厳しく取捨選択をしながら生きている」(注11)と知り、感動した。そこで、アーミッシュを参考に、筆者も、個人で、出来る範囲内で、文明を取捨選択するしかない、と考えた。そのことが、「懺悔文」「回向文」読誦の白々しい嘘と偽善を少しでも減らすことにつながる、と思ったからである。

アーミッシュを参考に、筆者が何十年前から、心掛けて来たのが、エネルギーをできるだけ消費しない、物品の購入をできるだけ減らす質素生活であった。地球環境汚染・破壊を食い止めることに対して、あまりにも微力だが、この方法しか無かった。

(3-3)しかし、自分の納得できる信仰持続のためには、質素生活程度では、不十分で、自然生活の取り戻しという観点が必要だと思った。最も身近な自然は、自分の身体であり、この身体という自然を文明による悪影響から守ろう、そして、自分の体はやれるところまで、自分で治そう。そのことで自己にかかる健康保険料が減る。このこ

とが次世代への迷惑を軽減できる、と気づき、整体実技を野口晴哉(のぐちはるちか)が始めた野口整体の一流派の先生や先輩について習い始めた。こうした追加の生き方の見直しを約10年前に始めた。そのうち、身心の健康に資する身体技法に興味をわき、ヨーガや静坐会や植芝盛平(うえしばもりへい)創始の合気道一流派の稽古にも行き始めた。

(3-4)上述((2-3)~(2-7))のように、「コロナ禍」を契機にして、現代日本人は、生活方法や生活の価値観を変えることを迫られている、と筆者は思う。その際、筆者の、宗教信仰心を土台においた、自分なりの上述の模索が参考になれば幸いである。

**(4:身体技法、生と死の学びの場と「コロナ禍」。安心した生き方をもたらすには、死生観・死生学は必要。しかし、それよりも信仰心の方が強力で有効。)**

(4-1)筆者は身体技法として、長年、野口整体のある流派・合気道のある流派・静坐・ヨーガを実践している。今回の「コロナ禍」で、いずれも、練習会とか道場とか教室が一時期、休みとなった。また再開後も、いずれの稽古・練習でも、マスク着用でソーシャル・ディスタンスをとって稽古・練習をしているのに、違いは無い。しかし、野口整体一流派や合気道一流派の先輩や指導者のコロナへの姿勢には、静坐やヨーガにおけるのと、違いがあった。整体あるいは合気道の先輩・指導者においては、整体・合気道の修行を日々重ねれば、仮に罹患しても「コロナ禍」を乗り越えられるのだ、という自信のようなものが感じられた。他方静坐・ヨーガでは、「コロナ禍」の受止め方は世間一般と同じであった。筆者の推測だが、それは、同じく身体を鍛錬するのだが、身体の鍛え方の根底に、創始者から受け継がれて来た死生観があるからだ、と推測する。なるほど、ヨーガの源のインドでは、輪廻転生思想が根強いらしいが、日本で、私の周辺でヨーガをやっている人たちは、輪廻転生を信じていない、というよりも、そういう問題にまったく無関心で、ヨーガとはアーサナ(体操)のことだ、と思ってやっている。また今通っている静坐会では、呼吸法と坐法という純然

たる身体技法に専念し、そこには死生観は窺えない

つまり、俗な言葉で言えば、“死に対する腹ができているので、死をむやみに怖れない”というのが、野口整体一流派や合気道一流派で、そこから「コロナ禍」への対処に自信が窺われるのだと思う。

野口晴哉は「生くる者は生くる也 死ぬ者は死ぬ也」(注 12)、「死生に動じないといふことはいつ死んでも心残り無いやうに生きることから始まる」(注 13)の言葉を残している。この心意気は、筆者の属する野口整体一流派の先輩・指導者に根付いており、先輩等から度々耳にした。

筆者の属する合気道一流派では、今は、コロナの関係(身体接触を避ける)で身体密着練習はせず、木剣や短刀(ゴム製)でこちらの急所を突いてこられた時の素手での対応を練習している。先輩に「もし実際に、真剣で突かれて、防げなかったらどうなりますか」と聞いてみた。「急所だから死ぬな。植芝盛平開祖は死と隣り合わせで、合気道の技を磨いて来られたのだ」との返事だった。

植芝盛平の、死と隣り合わせ、死との直面を取り上げた文章に次があった(注 14)。「陸軍の軍人六人が、二十五メートルも離れたところから盛平に向けて一斉にピストルを撃つというものである。二度これは行われ、二度ともピストルから弾が発射された時には盛平はピストルを撃った六人のうちの一人を投げていたとされる。(中略)しかし、別の機会に山鳥撃ちの名人が同様の『実験』をしようとした時には、盛平は弾が発射される前に、『あんたはワシを撃ってやろうなどという気持ちでこれっぽちもない』と言ってやめさせたという」。山鳥撃ちの名人は、植芝から弾をはずすつもりだったので、それを見抜いた植芝は「実験」を中止したというのである。つまり死に直面してこそ、合気道の真価があらわされるのだ、と筆者は推測する。

植芝の死生観を書いた書籍は見つからなかったが、上述の野口晴哉の「死生に動じない」死生観と同じだった、と筆者は推測する。野口・植芝とも、死生学を学んだということではなかっただろう

が、死を見つめ、死に直面し(野口は、死が間近に迫った人や死に至る難病の人、多数に整体操法をした)、それでいて死を恐れずに生き抜くことができた。その伝統が、現在の野口整体の継承者や合気道を実践する指導者に受けつがれて、「コロナ禍」でも動じていない、と筆者には映った。

(4-2) 島藺進氏は死に向き合うことについて、次のように述べられている(注 15)。「現代人は宗教はもう過去のものとして遠ざけがちだ。死に向き合うことも避ける傾向が強い。それでよいのか」と。また、死生学を説明されたその前の部分では「かつては、宗教にこそその答えがあると考えられていた」とも述べられている。また氏は寄稿文の末尾で「市民社会でもグリーンケアや『生と死の学び』の場が多様な展開を見せている。デーケン先生がまかれた種は、若手学究や専門研究者中心というよりも、むしろ市井の人々を通して育てられ、今後も豊かな実りを得ていくことだろう」と述べられている。

新聞に「死を語り生見つめる—『デスカフェ』で対話 コロナ機に注目—」の記事(注 16)があった。「デスカフェは、宗教や年齢に関係なくお茶を飲みながら死について気軽に話し合う試みの場だ。(中略)コロナで死を語るハードルが下がって参加者の層が広がった」そうだ。

デスカフェは、島藺氏の言われる、生と死の学びの場が、市井の人々を通して育てられている実例だと思う。

このように、今回の「コロナ禍」で、人びとにとって、死に向き合う機会が増えたのではないかと思う。死に向き合った次の段階として、死生学に親しみ、あるいは自らに合った死生観を固める機会もできるようなると思う。また、死に向き合うという姿勢を持っていれば、あるいは死生学を学んだ経験、死生観を有していれば、「コロナ禍」に限らず、人生や社会のいろんな重要な局面で、安心や納得への途を探しやすいのではないだろうか。

そして、その延長線上で、宗教関心者・信仰者も、今後増えて来るのではないだろうか。死生学の学びや宗教を離れた死生観よりも、宗教信仰

心は力強いものであり、人生や社会の難問題解消により有効だ、と筆者は思う。そして、そういう力強さや有効性に頼ろうとする現代日本人も増えて来ることで、宗教関心者・信仰者も、今後増えて来るのではないかと期待している。

(5 :まとめ—今回の「コロナ禍」後もホモ・サピエンスに迫る危機下での今後の宗教関心者・信仰者のあり方は、欲望追求を抑えた質素な生活で見本を示すこと、最も身近な自然である身体に関心を抱くこと—)

(5 - 1) 将来、上述の瀬戸内寂聴氏のいう「新コロナ」や異常気象による災害や人口爆発による予測できない事態が迫り来るなかで、宗教関心者・信仰者は、宗教無関心者に比べ、強みを持っている。

宗教に関心を抱く者は、死後の世界があるのではないか、この現実世界とは別の世界があり相互に影響し合っているのではないか、あるいは現実生活を超越した何かがあるようだ、と感じそこに関心を持つ。宗教信仰者は、更に一步踏み出し、それらを信じ、何らかの救済方法を模索する。そのため、関心者も信仰者も、現代日本人の多数の宗教無関心の人たちよりも、現実の生活や世界を、離れた立脚点に立ち、広い視野と長期間の展望の中でとらえることができる。そして信仰者は次の段階では、強い信仰の力を携え、信じる内容や救済方法の探求という実践に向かうことができる。

現代日本人の多くに浸透している“今さえ良ければそれでよい”、“欲望を充たすのが幸せ”、“死ねばすべて終り。死を考えないでピンコロで死ぬのが一番”という風潮の中で、上述の宗教関心者・信仰者は少数派ではあるが、貴重な存在である。

(5 - 2) 上述の赤字国債頼りの、現代日本人の生活ぶりを、健全な姿へもって行くには、自己治癒力の向上を始めとする身心の健康化、食生活を始めとする生活の質素化が不可欠である。生活の仕方、生活の価値観を変えることを迫られている、と筆者は思う。

信仰の力は強いものなので、宗教信仰者には、生活方式や生活の価値観を変える困難さは

少ない。

(5 - 3) 筆者にとっては、以前は信仰生活はしていたものの、月に1回は、どこかの病院に通い、いくつかの薬を、言われるままに、毎日服用していた。これを改めようと思い、野口整体の一流派に出会い、自然治癒力を高める指導を受けたり、整体以外にもいろいろな身体技法の訓練をする中で、自然と、薬は一切服用しなくなった。今では、医療機関へ行くのも、数年に一度、歯医者へ行く程度となった。介護保険の適用も、幸い受けていない。筆者は微弱とはいえ、赤字国債負担、中年・若年勤労者負担の軽減に貢献させて頂いている。これだけの変化を続けられたのも、信仰の力だと思う。

(5 - 4) 今後、地球温暖化、人口爆発、日本の巨額の赤字国債累積など悲観的な要素は多いが、まずは個人レベルのささやかなところから、生活方式や生活の価値観の変更を始めれば、光が見えて来るのではないだろうか。筆者は、それは質素な生活と最も身近な自然である身体に関心を抱くことだと思う。

くどいようだが、今回の「コロナ禍」の終息を願うと同時に、現代日本の多くの宗教無関心者の一部でも、今回の「コロナ禍」を契機に、現実世界だけにとらわれない長期的視野に立つことができる宗教関心者・信仰者となり、同時に、質素な生活や身体に価値や関心を抱き、今の「コロナ」や将来の「新コロナ」あるいは災害等に備える自己治癒力を養い、健全な(健康面・生き甲斐面だけでなく財政面も)日本への変貌と広く地球の甦りに貢献して頂くことを、筆者は夢見ている。

以上

(注1) 山内一也『ウイルスと地球生命』、岩波書店、2012、「まえがき」p. vi

(注2) 山内前掲書、p. v

(注3) 山内前掲書、p. iv

(注4) 朝日新聞朝刊 2020.9.4 の『「核のごみ」最終処分場どんなものなの?』の記事から

(注5) 「世界人口推計 2019年版:要旨(日本語訳)」(国際連合広報センター。プレスリリース 2019年07月02日)から

(注6) 「人口減少より人口爆発、2055年に100

億人になると何が起こるか」(ニューズウィーク日本版 2018年07月03日)から

(注7)朝日新聞朝刊 2020.8.13 のエッセイ「果てなき競争 戦争もコロナも」から

(注8)『実習 真言宗のお経』, 学習研究社, 2007, p.28 から: 懺悔文とは「我昔所造諸悪業 皆由無始貪瞋痴 従身語意之所生 一切我今皆懺悔」

pp.110 - 111 の説明(抜粋)「懺悔は犯した罪を打ち明けて悔い改めることです。打ち明ける罪悪はだれの心にもある貪(欲望)と瞋(怒り)と痴(愚かさ)という煩惱(迷い)によって生じるからです」から

(注9)前掲『実習 真言宗のお経』, p.50 から: 回向文とは「願以此功德 普及於一切 我等与衆生 皆共成仏道」

p.145 の説明(抜粋)「『衆生』は『生きているもの』『生命をもつもの』という意味で、『群生(ぐんじょう)』とも『有情(うじょう)』ともいいます。あらゆる生き物、生きとし生けるものすべてを慈しむ仏教の深い生命観を示す言葉です」から

(注10)堤順子『アーミッシュ』, 未知谷, 2010, p.9 「アーミッシュは十八世紀前半, 宗教的な迫害を逃れてヨーロッパからアメリカに移り住んだ人々を起源としている。彼らは, 電気や車, 電話などの文明の利器を使わず, 同じ身なりをし, 農業中心で自給自足の生活を旨として, 日常生活のさまざまな場面で, 互いに支え合い, 助け合

いながら, 一般社会から隔絶して暮らしている」。p.17 「二十世紀初めに五〇〇〇人だったアーミッシュは, (中略)二〇〇八年の調査では二二万五〇〇〇人(中略)その居住区はアイダホ州以外の全米四九州に広がっている」から

(注11)菅原千代志『アーミッシュへの旅』, ピラールプレス, 2011, 「おわりに」の部分p.228 「アーミッシュは文明から遠く離れて生きているのではなく, アメリカという文明社会の中で, それを厳しく取捨選択をしながら生きている人たちである。自分たちの意志で文明を拒否しているという点に大きな意味があるのだ。それは『文明という利便が人間社会に何をもたらすか』という問いかけなのである」から

(注12)野口晴哉『治療の書』, 全生社, 平成5, p.3

(注13)野口前掲書, p.96

(注14)清水豊『古事記と植芝盛平』, ビイグ・ネット・プレス, 2006, pp.30 - 31。そこでは, 植芝盛平の直弟子だった塩田剛三による『合気道修行』の内容紹介が行われている。

(注15)朝日新聞朝刊 2020.9.13 の「いのちの尊さ 死に向き合ってこそ—アルフォンス・デーケン上智大名誉教授を悼む—」から

(注16)日本経済新聞夕刊 2020.9.17 の「死を語り生見つめる—『デスカフェ』で対話 コロナ機に注目—」から

## 新型コロナ禍の礼拝に想う

根本和子(ライター, 教員)

今回, 宗教に関わる者の視点から「コロナ禍に想う事」というテーマで書く依頼をいただいた。しかし, 今後の行方を全く見通せない現状, なかなか建設的な提言が生まれてこない。ただ, 過去の歴史から, 宗教と感染症の関係などをざっくりと振り返りつつ, 考えるきっかけとはなった。

新型コロナウィルスは, 確実に宗教に打撃をも

たらしている。特にキリスト教など, 集会を中心とした宗教では深刻な影響を与えていると聞く。私が所属している教会でも同じだ。感染拡大防止のために, 一時は礼拝中止となり, 今は分散礼拝を続けている。聖餐式も讃美歌も席上献金も中止, 信仰告白も主の祈りも, マスク着用の上で小声でつぶやくように指導されている。

寂しい礼拝が何か月も続けば自然に人の交わ

りが減るし、感染を恐れて教会から足が遠のきがちだ。

かつて古代ローマ帝国で急速にキリスト教が広がり、ついに国教化するまでに発展した大きな歴史的要因に、天然痘などの感染症が広まったことが知られている。感染症の知識が今ほど進んでいない時代、率先して感染病患者と交わり、奉仕に努める教会の存在は、当時のローマ帝国の医療従事者や伝統的な宗教を凌駕し、多くの信者呼び集める結果となった。日本では、光明皇后が興福寺に施薬院と悲田院を設置し、仏教の隆盛につながったこともあった。

しかし、自然科学の発展により、宗教は猛威を振るう感染症に対して無力な存在と認識されていくようになった。ヨーロッパでペストが大流行した時代には、聖職者の権威は失墜し、中世神学の衰退をもたらした。20世紀に入りスペイン風邪が流行した時には、欧米の教会はクラスター発生の場所として公衆衛生的見地から、礼拝やミサの中止に踏み切った。

春先に政府から外出・イベント自粛の要請が呼びかけられたころ、日本の教会の一部では、いささか権威主義的な発想から「礼拝はイベントではないため中止する必要はない」と、礼拝中止に反対する声も上がったこともあった。だが、ヨーロッパで猛威を振るう新型コロナウィルスの実態が報道されるにつれ、反対者の声はかき消された。中世ヨーロッパの発想からあっさり現代へと移行した印象だ。

オンライン礼拝が始まった。説教はオンラインで聞くことも可能だ。だが、パンとぶどう酒を分かち合う聖餐式はキリスト教会の核心である。ソーシャルディスタンスは、これほどまでにキリスト教の儀式とは相いれないものなのかと、改めて痛感したものだ。

そんな中で、SNSを介して静かに広まったアマビエブームは、本当に興味深い現象だった。

かつてのように新聞や雑誌などの大手メディアから発信された流行ではない。また、東日本大震災に多発した、チェーンメールとは異質なものであった。江戸時代のような、護符としての広まり方とも異なっていると思う。ひとりひとりが個性を発揮

しながら、自己流にアレンジしたアマビエの絵、人形、アクセサリ、キャラ弁を、twitterやインスタグラムに投稿していた。

日本のアマビエ現象は、海外でも報道された。「8世紀に天然痘で多くの命が失われたときには東大寺と大仏を建造して疫病退散を祈った」歴史を紹介しつつ、日本人は伝統的に病氣と超自然的な存在を関連付けて考えてきた等の解説を記事に加えていた。8世紀の大仏建造とアマビエが結びつけられているのはいささか発想が飛躍的だし、単なる偶像崇拜と誤解されているのではないかと思う。

JTB総合研究所が発表した「アマビエに関する調査」(2020年調査機関3月26日(木)~29日(日))を見ると、若年層では「効力は期待しないが、少しでも気持ちが明るくなればそれでよい」という意見が主だった。対して「非論理的なものが流行するのは良くないと思う」と否定的な見解を示したのは、60歳以上の高齢層に多かった。過去の経験から、ブームの行き過ぎからくるデマや悪徳商法を懸念していたのだろう。

しかし、現時点でアマビエブームを振り返れば、それは杞憂に終わったようだ。一部では菓子やマスコットを販売する商業的な動きもあったが、いずれも害のない価格設定で、ことさら不安に付け込んで購買心をあおる商品ブームは醸成され難かった。

流行の担い手となった多くの若者たちは、アマビエをまず虚構の娯楽として受け入れ、手作りのアマビエの絵や食物の共有を楽しんでいた。それらは、外出自粛や休校期間の鬱屈した環境にいる仲間へのエールでもあり、また病の床にある人々への何らかの励ましとなることを、希求するものでもある。

なぜアマビエがこのような形のブームとなったのか、分析すべき今後の課題は多い。ただ、アマビエブームを振り返ると、つながりを求め、ともに何かをシェアし、共に祈願する自然発生的な宗教心は現在でも衰えていないのだと思う。

伝統的な聖餐式や礼拝は、感染拡大防止の見地からはリスクが高いことが認識されたが、宗教的儀式の在り方を根源的な次元で考え直す時

期に、差し掛かっているのかもしれない。

## 宗教心理研究の可能性 —進化心理学・進化精神医学的パースペクティブから—

原口 正(宇都宮大学 保健管理センター)

### 1. 新型コロナ肺炎と進化生物学

新型コロナ肺炎の原因ウイルスは、コロナウイルスの変異したものである。コロナウイルスは一本鎖 RNA (+) の RNA ウィルスであり、かぜ症候群(所謂ただの風邪)の 80 ~ 90 % の原因を占めるウイルスに1つである。通常であれば対症療法ですむ。一方、重症急性呼吸器症候群(SARS)の原因となる SARS コロナウイルスは 2002 年に中国広東省で感染が広がり、東南アジアを中心に多数の死者が出た。症状が重篤であるため、感染対策が強く取られ、2003 年には WHO によって終息宣言が出された。新型コロナ肺炎ウイルスはエボラ出血熱のように致死率も高くなく、インフルエンザや HIV のような治療薬も存在しない。比較的感染力が高く、容易に感染が広がるが、麻疹ほど感染力は高くない。致死率や感染力が高ければ、都市のシャットダウンなど徹底的な対策が取られるが、社会経済的活動を制限することに異議を申し立てる人も少なくない。RNA ウィルスは遺伝子構造的に不安定であり、ワクチン開発が成功するかも不透明である。したがって、SARS 流行時とは異なり、現時点では、新型コロナ肺炎流行は長期間に渡る可能性が高い。進化生物学の視点によれば、新型コロナ肺炎ウイルスは自己の生存という観点では、良く環境に適応した存在である。

### 2. 人間心理の進化心理学的視点と宗教心理

生物としての「ヒト」は社会的動物の一種であり、その認知や行動が進化の過程の中で淘汰・形成されてきたと考えるならば、宗教心理についても進化心理学・進化精神医学的視点(perspective of evolutionary psychology and psychiatry)が重要である。宗教心理についても、進化心理学や認知科学から考察するという

流れがあり、パスカル・ボイヤールの『神はなぜいるのか?』(鈴木光太郎・中村潔訳, NTT 出版, 2008)といった著作がある。しかし、日本ではこの視点で分析されることは多くはなく、進化心理学の体系的なテキスト自体が少ない。最も入手しやすいものとして『進化心理学入門』(ジョン・H・カートライト著, 鈴木光太郎・河野和明訳, 新曜社, 2005)がある。同書には宗教心理についての記述は無い。ディラン・エヴァンスらの『Evolutionary Psychology: A Graphic Guide』はイラストが豊富な入門書であるが、邦訳は絶版であり、中古で高額となっている。カリフォルニア大学バークレー校のデイビッド・バスの『Evolutionary Psychology: The New Science of the Mind』は基本的テキストの一つであるが、未だに翻訳されていない。同書の宗教心理に関する項目は「The Evolutionary Psychology of Religion-An Example of Transmitted Culture」(宗教の進化心理学: 伝播した文化の例)であるが、3 ページのみである。日本では、代表的な研究者である長谷川寿一と長谷川真理子の『進化と人間行動』(東京大学出版会, 2000)が広く読まれている。長谷川らは、人間の文化的側面や心のありようは、生物学に還元されないという「標準社会科学モデル」の影響が人文社会科学にはあると言う。このため、進化論的視点によって人間の文化そのものとも言える宗教心理を分析することに抵抗があるのかもしれない。進化精神医学についてはさらにテキストが少なく、『エソロジーと精神医学』(マイケル・マクガイア, リン・フェアバンクス, 加藤信ら訳, 星和書店, 1986)があるが出版年がやや古く、『進化精神医学-ダーウィンとユングが解き明かす心の病』(アンソニー・スティーブンスら, 小山毅ら訳, 世論時報社,

2011)はユング派の著作の訳である。ルール大学のマルティン・ブリューンの『Text of Evolutionary Psychiatry and Psychosomatic Medicine: The Origins of Psychopathology』が体系的テキストであるが未訳である。進化医学/進化精神医学の研究者であるランドルフ・ネシーは『Good Reasons for Bad Feeling: Insights from the Frontier of Evolutionary Psychiatry』(Dutton,2019)という臨床医として

の経験を踏まえた読み物としても面白い著作を出版している。新型コロナ肺炎流行下、これらの著作を読んでみて、宗教心理の研究方法の一つとして、進化心理学・進化精神医学の応用について模索しており、まずは上記の未翻訳の著作について翻訳出版できないかと考えている。賛同していただける方が居れば、ご一報いただければ幸いです。

## コロナ禍の地方寺院の営み

樋口広思(宮城教育大学, 貞松山無量院源光寺)

2020年9月現在、新型コロナウイルスの影響によって、都市圏に比べて感染がそれほど拡大していない東北地方においても、寺院の活動や地域に様々な変化が起きているように思います。本稿では、どんな変化が起きているのか、私自身の周囲で起きていることをお伝えしながら、そこから考えることを書いてみようと思います。

この原稿の依頼をいただいたのは、「特別な夏」のお盆を迎える頃でした。自坊では、毎年の盂蘭盆会は、檀家さんに本堂に集まっただき、共に勤行を行うことが慣例です。しかしながら、今年は本堂に集まることで三密になってしまうことから、受付後にすぐ焼香をしていただき、堂内に留まらずお帰りいただくようご案内しました。檀家さんから例年通りでないことに反発があるかもしれないと考えていましたが、「今年は仕方ないね」とご了解いただき、何とか無事に勤めることができました。

また、初盆のご家庭には訪問して勤行を行うのが慣例です。今年も感染予防に気をつけながら訪問をすることにしました。各家庭を訪問すると、玄関の下駄箱の上には必ずアルコール消毒のボトルやマスクの箱があり、勤行中は冷房を使用しつつの換気、勤行の後にくださるお茶はペットボトルや缶に変化していました。各家庭が、様々な感染予防策を講じてくださいました。これらの取り組みの背景に、檀家さんの家庭には

多くの高齢の方がいらっしゃるからであろうと考えていましたが、よりその意識を高めていたのが差別への恐れであると強く感じました。檀家さんから「もし(コロナに)かかったら、ここにいらねっっちゃあ(いられないよね)」「村八分が怖いからさあ」という言葉を度々耳にしました。地方においては罹患した人がどこの誰かといった噂があったという間に広がってしまう事態となっている現状があります。「コロナ差別」といわれる事態は本来起きてはいけないことであると多くの人は理解しつつも、同時に地方では罹患率の低さから稀有な存在に感じられること、地域が閉鎖的であること、悪い意味での共同体維持のための排除とでも呼ぶようなことが厳然と横たわっていることを改めて感じています。この「絶対にかかってはいけない」という集団内のストレスは、地域によって差があるのかもしれませんが、地方ではより色濃くあるのだろうと考えています。

新型コロナウイルスの広がりに伴って、病院や施設では院内施設内感染防止のため、お見舞い等の制限がかけられています。これは全国において起きていることですが、家族からは「おじいさんが入院してんだけども、お見舞い行っても会えねんだあ」「会ってないから認知症が進まないか心配だ」といった声から、臨終の際に立ち会えず「なんで今(コロナ)なのか」「コロナさえなければ」といった無念の声を聞くことも度々です。

亡くなった後も、葬儀は近い人たちのみで執り行うことが多くなっています。また、通夜や葬儀の後に思い出を語りながらの御齋も感染予防のために無くなっています。新聞の死亡広告の文面も「近親者のみで執り行い・・・」といった記述も多く、この文面が出始めた頃の新奇性を失われ、今ではすでにありふれた文面と感じている自分があります。これらの葬儀のあり方について「皆で盛大に送りたかった」「お悔やみにいきたいが、行って迷惑をかけてもいけない」という声があります。また、葬儀社の職員からも、この事態の変化において、供養の場の感染予防はもちろんのこと、遺体の搬送や管理など様々なことに気をつけながら行うといった、あまり公にされることのない苦勞を聴くことも度々あり、コロナ禍をきっかけ

に葬儀のあり方に変化が起きていく、その只中にいると強く実感しています。

コロナ禍で変化したこと、またそれに伴った様々な語りを紹介させていただきました。最後に、この事態を見つめていると、自坊のある石巻市も大きな被害を受けた東日本大震災で感じたことを思い出します。特に、震災によって大事にしていた人や物などが唐突に失われ、失われた後に改めてその価値の大きさに気づいたことを思い出します。コロナ禍においても、当たり前の人との交流、寺院でいえば親戚友人一同集まって供養するといった当たり前が失われて、その価値に気づくということが起きているのではないかと考えています。

## ウィズ・コロナ時代の宗教研究

横井桃子(名古屋大学)

実証研究は社会科学の根幹をなす。現場に赴き、社会を観察し、社会のありようを描き出す。筆者にとっての宗教研究は、宗教教団や宗教にかかわる人々の意識を社会関係から捉えようとする、いわば宗教を通して社会を理解する手立てとなるものである。その"社会"が今、新型コロナウイルス感染症の流行によって大きく変動している。政府によって新しい生活様式が示され、医療体制や福祉、労働、経済、家族、政治... 社会のあらゆる分野が変化を余儀なくされている。当然、宗教もその変化への対応に迫られている。宗教施設・宗教コミュニティでの集会やイベントの開催は困難になり、中止・延期や縮小、または(技術やスキルがあれば)オンラインでの実施へと変更せざるを得なくなった。

研究者もまた、フィールドワークを基礎的な研究活動とする者は、今回の新型コロナウイルス感染症の広がりによって少なくない影響を受けた。国外調査のみならず、国内調査でも県をまたぐ移動は大きく制限された。緊急事態宣言によって大学構内への入構制限が設けられ、在宅勤務

をせざるを得なくなった。2020年9月末現在、筆者の所属大学・居住地域ではようやく様々な制限が解除されつつあるが、それでもやはりフィールドワーク、特にインタビュー調査などは感染予防を徹底しながら、調査対象者にも十分な感染対策を説明した上で意向を確認し、慎重に実行をしなければならない状況である。私たちは、もはやコロナと闘うというよりは、感染リスクを認識し十分な対策を講じた上で、コロナと"うまく付き合いながら"、研究を積み重ねていく道を選ぶよりほかない。

では、この"ウィズ・コロナ"の状況下での宗教研究はどのようなものが遂行可能で、どのようなものが求められているのかについて、少し考えをめぐらせてみたい。

フィールドワークを伴う研究は、前述の通り感染対策の徹底が不可欠である。インターネット技術の発達により可能となった Zoom や Skype の遠隔会議(通話)システムを利用したインタビュー調査等も検討すべきであろう。しかしながら、たとえインタビュー調査を主とした研究であっても、宗



教を対象とする限りにおいて、宗教的に意味のある場所に赴くことは、「相手の懐に飛び込み、当事者の意味世界を知る」ための実践として重要なものと考えられる。宗教コミュニティの機能を研究する筆者も、これまで多くの宗教施設を訪れ、宗教的な場で生まれる相互作用を観察してきた。現地調査でしかできないこと／インターネット技術でこそ可能なことを見極め、これらを組み合わせて実践することが必要である。

量的調査研究もまた、訪問面接による社会調査は現状実施が困難である。そこで新しい調査法としてウェブ調査がある(なお2020年10月におこなわれる国勢調査も調査員の訪問を可能な限り減らし、ウェブ回答を推奨している)。奇しくも『社会学評論』第71号1巻(2020年6月)では特集「インターネット時代の社会調査法」が生まれ、ウェブ調査の効用が議論されるに至った。今後、宗教研究でもこうした新しい調査技法を積極的に用いる可能性は十分にある。もちろんウェブ調査にもリミテーションはあることを認識せねば

なるまい。たとえば「宗教を信仰する」あるいは「自身を宗教的な人間だと思う」割合は、日本では若年層よりも高齢層のほうが多いが、一般的には高齢層はインターネットを使いこなすことには不慣れであるため、回答が偏る傾向が考えられる。

宗教の変容は常に社会の変容とともにある。コロナの前後で私たちの社会生活は大きく変わった。宗教研究、こと経験科学の手法に基づく研究では、こうした社会変化に伴って、宗教の何が変わって何が変わっていないのかが明らかにされていくことが重要になる。コロナ禍にあって、宗教にかかわる人々は何を思い、自身や社会をどう省みたか、人々の宗教意識はコロナを経てどのように変わったのか——それは特定の宗教に限られる現象なのか、他の国・地域ではどうなのか——切り口は様々あるだろう。研究者それぞれの立ち位置から、宗教と社会との関係が明らかにされていくことで、宗教研究全体が発展することを願っている。

## 牧師の立場からキリスト教会の課題について思うこと

渡辺俊彦(上馬キリスト教会牧師, 牧会学博士)

今、新型コロナウイルス感染者の拡大により、社会全体が様々な影響下の中で苦闘している。そのため、一般社会は新しい生活スタイル、新しい仕事スタイル、新しい余暇スタイルなどが求められる状況になり社会の経済構造の変化が起り始めている。また、個々人に目を向けるとアイデンティティの混乱が起き心療内科の患者が急増しているという。

様々な社会構造変化とアイデンティティの混乱が起きている昨今、教会として私たちが注意しなければならない点がある。それは、日本のキリスト教会の傾向である「個人主義的信仰」「無教会主義的信仰」に傾かないことである。キリスト教会は、共同体的信仰に生きる聖霊共同体である。教会は、有事の時こそ、共同体的信仰に生きることが求められその実体が明らかになる。個人

主義的信仰、無教会主義的信仰に傾けば、教会史で経験した悲劇を繰り返す結果になってしまうであろう。

今こそ、私たちは教会の歴史に学び「霊的生命」「共同体的生命」「共同体的信仰」を維持するための新しい礼拝のあり方を構築する必要が求められている。旧約聖書の歴史では、イスラエルの民がエジプト捕囚の民として歩む時代があった。神様は、その民の祈りと叫びを聴いて下さりモーセを用いて「解放」して下さったのである。時代が進み、イスラエルの民はバビロンに連れて行かれ捕囚の民となった。神様は、そのバビロン捕囚からもエズラを用いて「解放」し祖国に帰還させて下さったのである。この捕囚という言葉を用いて、今の状況を表現すると、新型コロナウイルス捕囚と理解したい。

特に、考えさせられるべき点として、イスラエルの民は、バビロン捕囚の時代シナゴク(会堂)を誕生させ新しい礼拝のあり方を構築したことである。それは、神殿における礼拝行為から会堂による礼拝行為へとあり方が変わったということだ。この変化によって、イスラエルの民はアイデンティティを崩さずそれを保持し共同体的信仰の歩みを可能にしたのである。この歴史的流れが今の会堂における礼拝の姿である。

クリスチャンのアイデンティティと共同体的信仰は、共同体的礼拝を中心として精神的生命と霊的生命が深く結びついているということわかる。そして、何よりもひとつの所に集まり礼拝をする行為の重要性を教えているのである。キリスト教会は、新型コロナ捕囚の時代に神様の時(カイロス)が訪れた時、神様が必ず何らかの方法で解放して下さる希望に生きる共同体ということである。

使徒の働き 2 章 46 節～ 47 節に「そして、毎日ひたすら心をつにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。」(新共同訳)とある。新しい新改訳は「そして、毎日心をつにして宮に集まり、家々でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美し、民全体から好意を持たれていた。主は毎日、救われる人々を加えて一つにしてくださいました。」と訳している。この使徒の働き 2 章 42 節には「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。」(新共同訳)とある。

使徒の働きの記述からもわかるように、初代教会はひとつの所に集まり説教と主の晩餐(聖餐)を中心とした礼拝を大切にしていたのである。オスカー・クルマンは「初代キリスト教徒たちは、意識的にユダヤ教から区別して、週の最初の日を選びわけたのであった。この日にキリストが復活し、この日にかれが食事に集まった弟子たちに現れたからである」(邦訳「原始キリスト教と礼拝」1957 年新教出版社 14 頁)とひとつのところに集まる根拠を語った。つまり、週の最初の日(日曜

日)に復活のキリストが「食事に集まった弟子たちに現れた」ということである。

紀元 150 年頃ユスティノスの「弁証論」一巻 67 章に当時の礼拝に関する最古の記録とされている文章には次のように記録されている。

「太陽にちなんで名づけられた日に、都市に住む者も農村に住む者も、すべてひとつ所に集まり、使徒たちの覚え書や預言者たちの書物が、時間のゆるすかぎり朗読される。朗読者が読み終わると、司会者がそれらの貴い教えに従うように、教え、勧め、戒める。ついでわれわれは全部起立し、共に祈りをささげる。そして祈りが終わると、前に述べたように、パンとぶどう酒と水とがはこばれる。それから、司会者は力をつくして祈りと感謝とをささげ、会衆は『アーメン』と言って唱和する。各人は感謝された形色の分け前にあずかり、欠席した人々には執事によってそれがとどけられる」

(Dre Gottesdienst nach Justins Apologie. (Quellem zur Geschichte des christlichen Gottesdienstes)S.4-6.Duchesne,ibid.,p50.)

この最古の礼拝の様子記録からも幾つかの点がわかる。第一に、彼らは「ひとつの場所に集まった」ということだ。第二に、ひとつの場所に集まった人々にとって、神の言による礼拝と主の晩餐(聖餐)が結びついており、普通の食事と分離して主の晩餐が執り行われていたということだ。しかも、この頃の礼拝は固定化したものとなっていた。礼拝が固定化した理由として、教会の初期の指導的な立場にあったペテロ、パウロ、ヤコブなどはイエス・キリストの目撃者であり生々しい証言者であった。そのため、初期の教会は預言者的興奮が盛んな時代であった。このような興奮はいつまでも継続することはない。この興奮がやがて沈静化し礼拝が固定化するようになったのである。

また、「ディダケー」(Didache)の 14 章では、キリスト者たちに「主の日」に集まってパンを裂く(主の晩餐)ことを勧めている。あるいは、総督プリニウスが皇帝トラヤヌスに宛てた手紙にも、キ

リスト者たちが「定められた日」に集まって礼拝をしたという記録が残されている。従って、「ひとつの場所に集まる」ということが重要なのである。

だから、私たちは新型コロナウイルス捕囚の期間に共同体的信仰に立ってどのような歩みをするかが問われている。この問いに応えるためにぶれてはならないことは、同じ場所、同じ空間に身を委ね共に説教と主の晩餐（聖餐）を中心とした礼拝を構築する神学的営みだ。教会がこれまで築いてきた教会論や礼拝論の再確認、再評価をする神学的営みが必要である。なぜなら、神学的営みを無視あるいは軽視してこの有事の状況下で対処療法的な対応にのみ右往左往しては、教会の共同性が崩壊してしまうからだ。一般的に宗教を信仰者の共同体のひとつとして研究することがある。しかし、新型コロナ禍の状況下でキリスト教会を信仰共同体よりも共同体信仰という視点で神学的に思索することが大切であろう。

そして、教会の歴史と教会論と礼拝論を基礎としながら、どのようにして適切に「ひとつの場所に集まる」という新しい礼拝のあり方が可能なのかを構築する必要が求められているということである。

さて、現在キリスト教会は、新型コロナウイルス感染者が増加している状況下でどのような対応をしているであろうか。各教会の対応の傾向は以下のような状況である。

- ① 牧師や役員（長老、執事）で礼拝を護りながら教会員に向けて同時ネット配信をする（Skype, Zoom, LINE）教会。
- ② YouTube, Facebook などを用いて牧師と奏楽者のみでネット配信をする教会。
- ③ 事前に週報（礼拝の式次第と報告等）と説教の原稿を毎週教会員に送りネット配信を通して同時刻に個々人で礼拝をするかたちで対応している教会。
- ④ 従来通りの礼拝を維持している教会
- ⑤ YouTube, Facebook など不特定多数の視

聴者に向かってネット配信をしている教会。

#### ⑥ その他

私たちの教会は、三月に「新型コロナウイルス対策のためのガイドライン」を作成した。また、六月には「新型コロナウイルス対策のためのガイドライン」の一部を修正した。教会のカイドラインに添って、会堂でソーシャルデスタンスを確保できる人数を上限とし予約制で礼拝を執り行っている。礼拝出席の予約に漏れた方々のためにはZoomで礼拝の動画配信をしている。また、ご高齢の方や疾患のある方々の礼拝には、最初から終わりまでCDに録音し自宅に届け、時々ご自宅を訪問し主の晩餐（聖餐）を執り行っている。但し、礼拝のネット配信は新型コロナウイルスのワクチンや薬がインフルエンザと同じ扱いになるまでの期間と限定している。その後は、基本的に中止の予定である。このような対応をせざるを得ない状況であるため、新来者の方々は心痛めながらお断りしている。

以上のような対応をしながら今に至っているが、案の定今年の3月から今に至るまでの期間、礼拝に集まれない方々（他教会の方々も含む）が精神的、霊的に枯渇<sup>\*1</sup>しストレスフルになっている訴えが多い。私は、その方々が何とかひとつの場所である会堂に集まり共同体的礼拝に参加すると「共同体的祈りや賛美が、説教が精神的、霊的に染みてきます」と号泣する姿を何度となく見た。そして、彼らから「ネット配信による礼拝は限界です」との言葉をよく聴くようになった。このような訴えと反応を通して、ひとつの場所に集まり共同体的行為である礼拝が重要であることが明らかになった。

さて、現在の教会の新型コロナウイルスの対応に共通しているのは「ネット配信」ということである。この「ネット配信による礼拝」について聞き取り調査を試みた結果、様々な弊害を生んでいることがわかった。要約すると以下の通りである。

\*1 精神的、霊的な関係性について研究中であるが特に霊的枯渇をスケール化するための研究を感じている。また、共同体の霊性の枯渇と個々人の霊的枯渇の関係性に関する研究課題があることも付随して感じている。

- 1) ネット配信による礼拝が通常化になりつつある状況下で「教会に行かなくても良いのではないか」「スクリーン越しでも時間を共有すれば良いのではないか」と主張する牧師やクリスチャンが少なくない。この点については、予測していた通りの現象である。
- 2) 益々無教会主義的傾向を強化された。  
もともと日本の教会は、無教会主義的傾向が強い。例えば、「ネット配信による礼拝は、ひとつの所に集まる必要性がなくなり便利である」という主張が多くなった。このような反応は、益々無教会主義傾向に拍車をかけたということに他ならない。
- 3) 教会論や礼拝論が希薄か無理解であるということが明らかになった。
- 4) 個人主義的信仰が中心であり、共同体的信仰が形成されていない。あるいは、希薄であるかことが明かにされた。
- 5) 教会が教会形成と言いながらもその実体は伝道団体の形成の傾向が強いということが明らかになった。
- 6) 礼典( sacrament)に対する希薄さも深刻な問題となって明らかにされた。牧師や教会員の方々に「スクリーンの前に座り自分でパンと葡萄酒を用意し牧師の司式に従って食せばよいのだ」と主張する人が増えているなどは一つの例である。
- 7) 新型コロナウイルスの問題が起こり半年を経過し「ひとつの場所に集まる重要性」を訴える方々も起こってきている。  
以上である。これらから、今後取り組むべき課題は「ひとつの場所に集まり説教と主の晩餐(聖餐)に与る」重要性の再認識である。そのためにも教会論と礼拝論の再検討と教育が求められる。そして、私たちに求められていることは新型コロナウイルスに対応した新しい礼拝のスタイルの検討ではない。むしろ、いかにして新型コロナウイルス感染予防をしながら「ひとつの場所の集まり説教と主の晩餐(聖餐)に与るか」という検討である。この検討をしながら無教会主義的傾向の克服に向かって新しい歩みをしたものである。

## 事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第 31 号が発行されました。今号では、「コロナ禍で想うこと - 宗教を学び、宗教を語り、宗教を研究し、宗教を実践する者として-」の特集を組ませていただきました。18名の研究会メンバーに執筆していただきましたが、それぞれの立場から大いに語っていただき、私自身も多くのことを学び、考える機会を持たせていただきました。

私たちは、おそらく当分の間、この「コロナ禍」での生活していくことになると思いますが、今回のニューズレターが「コロナ禍で生きていく、生活していく」にあたっての何かしらのヒントになれば大変嬉しく思います。

これからもニューズレターを始め宗教心理学研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。(K.M)

発行：宗教心理学研究会

編集：宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当：松島公望 [ psychology-religion@office.so-net.ne.jp ]

研究会ホームページ管理・運営

担当：藤井修平 [ yrsk.f@nifty.com ]

研究会ホームページ

[http://www.geocities.jp/psychology\\_of\\_religion\\_japan/](http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/)